太陽系の王様 THE KING OF SOLAR SYSTEM

Novel Factory♪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

太陽系の王様　ＴＨＥ　ＫＩＮＧ　ＯＦ　ＳＯＬＡＲ　ＳＹＳＴＥＭ

【Ｎコード】

Ｎ２７３３Ｖ

【作者名】

Ｎｏｖｅｌ　Ｆａｃｔｏｒｙ♪

【あらすじ】

西暦２３４０年。

表世界と相対する世界である裏世界には太陽系の惑星を模した十の国があり、裏世界の各国の“魔力持ち”は自国と表世界に存在する惑星を守護する役目を持つため、“守護神”として敬われていた。

裏世界に召喚されてしまった記憶喪失の少女・篠原綾乃は、太陽国国王の命で秘密裏に“魔力持ち”を探し、近い未来起こると予言

されている戦争を阻止するため、一人の少年を伴って旅に出る。

だが、巨大で狡猾な陰謀下で運命の歯車はあまりにも残酷な方向に回り始め――――。

未来・現在・過去が全てリンクする、第三次魔法大戦ストーリー。

※他のサイトにも掲載しております。

プロローグ『鳥籠（ろうや）』（前書き）

プロローグ『鳥籠（ろうや）』

裏世界は、表世界の“とある一人の人間の中”に生まれた。

次第にそれは大きくなり、やがてはその人間を食い尽くした。
自らを媒体として成立したために、裏世界から出られなって寂しく思ったその人間は、表世界からかつての友二人を裏世界に取り込んだ。
紆余曲折の末、その人間の友であった男女は、アダムとイヴのように裏世界の核心に迫って、独力で表世界に帰ってしまう。

嘆き悲しんだその人間は、裏世界で不死身になるように自らをデータ化し、その後いつの間にか裏世界に他にも人が生まれ、それぞれの文明を築いていった。
時を経て、次々に出来た国々は戦争や、その厳しい気候によって興亡を繰り返す。

そして———今のような十国に落ち着き、互いの国を高め合っている。

表世界と同じ年に、似た出来事が起こっているのは、偶然ではない。

二つは相反する世界であるが故に、互いに影響し合っているのだ。

冒頭の言葉より抜粋

プロローグ『鳥籠（ろうや）』

「・・・・・。」

所々破れたボロボロの布を纏った少年が、高く積まれた石の壁を背にして蹲っていた。

ふと正面を見ると、固く閉ざされた鉄の扉があり、辺りには手を軽く乗せるだけでギシギシと軋むベッド、埃の溜まった木製の机と椅子――そして、冷たい石畳の床と壁があるだけである。

ブルブルッと少年は身震いした。

石の壁には微かな隙間がたくさんあり、風が吹き込んでくる上に、一年中冬のような土地なので時折雪が入ってくることがあった。

（寒い・・・僕、どうしてこんな所にいるんだろう）

少年はその汚い牢屋に物心もつかないうちに入れられてしまっていたのだ。
手を動かす度に、チャラチャラと壁に繋がっている鎖が音を立てる。
（まるで、僕は植物人間だ。――――いや、僕は植物なんかよりも“自由”じゃない。ただ・・・・・生かされてるだけ）
少年には、もう自分が人間なのか、はたまた生きているのかそうでないのかさえ、疑えてきた。
「“僕”は誰なんだ・・・？」
泣くような声で、無理矢理言葉を絞り出す。

「なァ」
鉄の扉の向こうで、見張りの兵士の一人が言った。
隣に立っている兵士が振り返って、「何だ？」と問う。
「この中にいる奴ってさ、ガキなんだろ？魔力強いのか？魔法壁張るくらいにさ」
「前に聞いた。・・・・入って一度も、少しもメシ食わなくても、ヤセたりしないんだと」
うわ、気持ち悪い。本当にオレらと同じ人間か、と牢屋の方を見遣った。
「でもなあ、俺にとって“魔力持ち”自体が異質なんだよ」
「あ、オレもオレも！確かにそう思う。民草の中じゃ、魔物や怪物だって説があるくらいさ」

「魔法使えんだし、変身しててもおかしくはないんだよな。でも一般市民からランダムに生まれる辺り、自分の先祖が“魔力持ち”ってのが存在するし。それは置いといて・・・・・こんな話も聞いた。コイツは主のご子息で――――」

一方の兵士はこの任に着いて五年、もう一方の兵士は先月転任してきたばかりであった。二人共黄色のラインが付いた緑の制服を乱れなく着こなしている。

彼らは、軍のトップエリートだ。

極めて優秀な兵士がわざわざ選抜されて、こんな見張りに任じられるのは変であると言う者も多かったのだが、これからはそう批判する者もいなくなるだろう。

なぜなら。

「直に、死刑になるそうだ」

鉄格子の牢屋ではないけれど、扉も、石の壁も厚いわりに、中まで二人の兵士の

声はしっかりと届いている。文字や言葉を特別習った訳ではないが、自然と会話の

内容を理解することは出来た。

（・・・・・・・・・・・・。）

「じゃあ、この任務は終了ってこと？」

「まあ、そうなるだろうな。お前、――――来たばっかでまた人事異動ってのはどうかと思うけど――――、どうするつもりだ？」

「どうするつもりって・・・・人事異動を了承するに決まってるじゃないか。そんなこと聞くからして、そっちはやっぱ違うの？」

「ああ。地方に戻る。この任務、単純なようで結構病んでくるんだ。常に地下で、何にもすることが無い。それを交代制無しに五年だ。確かに人選は間違ってないと思うな。一般兵じゃすぐ死ぬ」

狂ってきて、挙句の果てに自殺。

山を越えて慣れてしまい、今ではどうってことない彼だが、それは自身にも起こり得ていたことだ。

なるほど、ともう一人の兵士はそれに同意する。
「・・・・・・死刑って、言ったよな」
そして再び、牢に目を向けた。

少年は、今の状態は死んでいるのに等しい、そう思うと別に大して“死ぬ”ということに恐れを抱きはしなかった。
兵士達に何を言われようと、どうでも良かった。

・・・・ただ。

ただ、もし―――生きていいって、必要だって言われたら・・・生きていたい。

生きていても、何も出来ない。出来はしない。
ただ、本当にただ生きるだけ。
いずれ来る、寿命が尽きるその日まで。

生きることへの渇望には、論理的な理由は無かった。ただ単に、身体が、心が、もしくはそれ以外の何かが、深くそれを望んでいた。
・・・・・でもそれも、終わる。

新米の兵士が「十四年も生かしておいて、今更って気はするけど・・・可哀相なもんだな、コイツもさ」と言うのを上の空で聞き、少年は自らの膝を抱える手に力を込めた。

プロローグ『鳥籠（ろうや）』（後書き）

どうも、ＮｏｖｅｌＦａｃｔｏｒｙ♪です。
初めての投稿ですヨー！！
この『太陽系の王様』は６～７年物（笑）です。何度も推敲を重ね、表現をよりレベルの高いものにしようと頑張りましたー。（ですが、第一章の途中から展開をガラッと変えていますので、書き直したりしていません）

誤字脱字はあると思いますが、よろしくお願いします。

感想・希望等、ありましたら是非教えて下さい。

第一章『光の掟』・第一話『夕暮れの大地・常夏の城』Ｐａｒｔ１（前書き）

第一章『光の掟』・第一話『夕暮れの大地・常夏の城』Part1

裏世界にある太陽国の王城内の一室、“儀式の間”の床に描かれた、光帯びている巨大な魔方陣の中心に、少年少女が七人横たわっていた。

それを、全身真っ白の、所謂白装束の男達が取り囲んでいる。

『・・・――――召喚は成功だ。この二十歳にも満たない子供達の中に、彼の者がいるということなのだな？』

『この儀式は神聖で正確なものだ。そうでなければ意味がない』

『そうだ』

『残りの者には、あちらの世界の我が君も含まれているのだろう？』

言った男の隣に立つ者が、

『私の主もだ』

またその向かいの者が、

『同じく』

白装束達は口々に言った。

彼らの帽子はシンプルかつ縦長で、帽子に付けられた布で顔を被い、足先までしっかり隠れる長さのマントも、当然のように真っ白であった。

次第に魔方陣の光は薄れ、完全に消えた。

それに伴って、白いチョークか何かで描かれたらしい魔方陣自体

の線も、朧げになっていく。
　更には、魔方陣上の一人の少年までが、データが分解されるようにその身体が欠けていった。
　男達は儀式の終焉を確認し、円陣内に踏み込み、うち一人が残った七人の中で最も年上らしい少女を軽々と抱えあげた。
『その娘は』と、他の男が言い掛ける。
『ウェーブの金髪にこの上品な面持ちの美少女・・・・とくれば、私の主、サラ様であろう』
　お姫様だっこ状態で、未だ意識の戻っていない少女の顔を、男達全員が見詰めた。
　既に成人しているとすると、それにしてはあまりにも幼く見える。していないとしても、もうすぐ迎えるといった年齢。とにかく、十代後半か、二十代前半といったところなのだろう。
　レースの付いた淡い空色の服に、ネックレスを首から下げ、抹茶色のバルーンパンツの下に脹脛の中ほどまでのレギンス、それから銀色のパンプスを履いていた。
　彼女の背には小花柄のリュックがある。大学生か、専門学校生のようだ。
『そのようだ』
『やはり裏世界の者と魂を同じくする者だけあって、表世界の者も容姿は似ているようですな。年齢に、違いはあれど』
　同感だ、と皆頷く。
『多分、それで間違いないだろうな。その娘、金の姫そのものだ』
『では、外見で判断するとしよう』
　床に横たわったままの五人の少年少女をじっくり眺める。
　先程の少女より少し年下らしい少年は、男子にしてはやや長めの、茶色がかったさらさらな髪と、インドア派を窺わせる白い肌が特徴的だった。
　彼が着ているのは制服で、深い緑のブレザーにネクタイ、ズボンは同色系統のチェック柄だ。胸元には、皐嘔学園の紋章。

『このお方は・・・・レイト様では？』
『確かに似ていらっしゃる。間近では見たことはないが・・・・・・間違いなかろう。では、こちらは・・・・・誰であるか』
近くに倒れている漆黒のセミロングの髪の少女も、学校は違うようだが制服（因みにそれはセーラー服）を着ていた。その少女は先程の少年からまた更に年下に見える。
『他の“魔力持ち”――――、もとい守護神様は、ステア様とテイム様だけの筈であろうが・・・・・この者はステア様でも、況してテイム様でもあられますまい』
『では、“　予言の君　”か？』
ちょっと待て、と誰かが引き止めた。
『見てみろ。まだ男女合わせて三人もいる。うち二人がステア様とテイム様にしても、あと一人余る』
3、4歳程度の男の子と、5，6歳の女の子。それから十代半ばの、これまた制服姿の少女。
『この幼子・・・・』
『テイム様だな。性別も変わってしまうものなのか・・・・』
『どうやら、この一番ちっこいの・・・・・男の子だがステア様のようだ。残りの二人・・・・・・・片方は“　予言の君　”であるとして、もう一人は。よもや、“　魔の国　”の守護神ではあるまいな？』
『分からぬ。まあどうであれ、いつかは覚醒するのじゃ。その時を待つのはいかがかな。何が起ころうとも、彼のご意思に背くことは許されないじゃろうて』
「遅いな。もうとっくに儀式は終わったのだろう。何かあったのか？」
その声に、皆一斉に振り返った。
白装束の男達の中の背後にあったドアが開き、そこから偉そうな

三十代前半の男が顔を覗かせている。
『サフィール王！お体の具合は！無理してはなりません！』
顔を青褪めた一同を前に、王サフィールはふんぞり返って見せた。
「ほうら、この通りだ。今日は体調がすごく良いから大丈夫だ」
本当かなあ、と疑いの目が向けられる。
何しろこの数週間というもの、彼はずっと寝たきりで、時々調子の良い時に出回っては悪化するというのを繰り返しているからだった。
要するに、彼には前科がある。
「信じてはくれないようだな。ところで、何があった？教えてくれ」
『それについては後ほど。この計画には、彼と、あともう一人・・・・・・預言者の協力が必要になりますぞ』
『幸か不幸か、その預言者は今ここにいらっしゃる。・・・・・・ですが、我が君、運とは無縁な感じでございますな。　予言の君の記憶が失われれば、忽ち預言者も失ってしまわれるだろう』
・・・・いや、もう既に、と言うべきか。
男の予言めいた言葉に、王は眉間にシワを寄せた。
「その因果関係は」
『分かりませぬ。“　魔力持ち　”　間には数多の“連鎖”がありますゆえ、特定に至りませぬので』
それにしても、と召喚された七人のうち唯一消えた少年が横たわっていた場所を見遣った。
「やはり、死体は保たない。召喚するだけ無駄だったか・・・・・・だが依代は一人で、もはや十分」
『はい、その通りに御座います』
『王、この後は手順通り、預言の君らしき者を除いたその他は用意されております、彼の宝玉に封印するのでしたね』
「ああ、そうだ。魂の同じ者が同じ空間にいるのは双方体に良くない。時が来るまでは、宝玉の中の異空間で眠っておいてもらわねばな」

『過去の例も、あることですし・・・・・・ね』
一瞬王の目が鋭くなる。それから、至極真面目な面持ちで深々と頷いた。
「・・・・・・皆の者、解散を」
『承知いたしました』
儀式の間を出て行く男達のうち、一人が残って、『王、実は・・・・・』と、今まであったことを耳打ちした。
「なっ！何だと！それでは“予言の君”が誰なのか分からぬではないか！敵国がいつ攻めてくるか・・・・・！」
憶測の域なので絶対ではありませんが、と男が前置きをしてまたボソリと王に何かを告げると、王の表情が一変した。
「おお！そうであったならこちらに好都合だ。現実であることを願おうぞ」
『はい』

「王、サフィール王。それで、どうなさるおつもりですか。予言の君であるかもしれないと思われる者は二人。あの　高貴なるお方が眠っていらっしゃる以上、判定は不可能です。我々の同胞の中には、覚醒まで待つのが良いかと考えておる者も多いようですが、私はそのようには思いません。王は、どのようにお考えで・・・・・」
儀式の間にいた白装束達―――もとい、各国の神官達の中で一番若かった男が、普段着に着替えて王の前に跪いていた。
若い割りにしっかり神官の任を務める彼を、常々サフィールは評価している。

五、六十代の神官が多い中、二十代後半にして難なくこなしているのは心底凄いと思う。違う国の神官であるが、友人のような関係を築いているのには、自身の年齢に近いという理由に加え、こうした身分を越えた尊敬の念が関与している。

とはいえ、公の場、もしくは個人的にでも政治に関することにおいては、勿論自らの身分を弁えた言葉遣いを心がけている。

プライベートともなれば、面白いほどに違うのだが。

「う～ん、どうだかなあ」

気の抜けた調子の返答に、若い神官・ソロンは目を細めた。

ここまで公私にメリハリを付けなくてもいいと思うのだが。

・・・・・いろいろな意味で不安だ。

「ダメじゃないか、王のキミがそんなんじゃ。ただの一国の国王ならまだしも・・・・キミは、この“裏世界”のリーダー国である“太陽国”の王なんだぞ！俺ら神官だけでなく、民まで不安にさせてしまう」

王の言動に合わせ、政治に関することながらタメ口に切り替えた。

「そうなんだが、そうもいかないんだよなあ。王の一存で物事を決めてしまうのはいかがなものか。いっそ、何事も国民投票とか・・・・」

「王！」

「・・・・冗談さ」

本心的には冗談ではない。

王の一言で全てが決まるのだ、責任は相当重い。

王の政策によれば情勢は百八十度変わるし、それが民に受け入れられなかった時はクーデターだって起こる。

やはり、慎重にすべきだと思う。・・・・だからこそ、迷うのだが。

それに、国民の気持ちは宮廷生活の国王には量り兼ねる。

何が今一番必要なのかは、本人達にしかわからない。その意見を出来る限り反映させられるのが理想的な賢王だと考えている以上、

目安箱のようなものがあればいいのにと考えてしまう。
「冗談は時と場合を考えて言うように。・・・・その意見 、強ち間違ってはいないけど、問題なのはキミの決断力の無さだ」
「それはそれは。ソロン神官も苦労なさいますなあ」
「まるで第三者のような口ぶりだな。ところで、そろそろ本題に戻るよ。 で・・・・・どうするつもり？」
「・・・・・・。取り敢えず待とう。どちらにせよ、旅させないといけないだろう？そうして“魔の国”にバレないように移動するなら、徒歩で各国に行くしかあるまい。十国の内、半分は敵国の領土だしな。その上空をワールドコネクトベルトで行くのは危険としか言いようが無い」
「・・・・・その旅の中で、分かるのでしょうね、予言の君が誰なのかということが」
ソロンは口調を元に戻した。
ああ、と頷いて、サフィールは六人の子供達を思い浮かべる。
その内の四人の少年少女は、各国の神官によって宝玉の中に封印されたと、つい先ほど報告があった。
残った二人の少女の内の片方が味方で、もう片方が、敵・・・・。
「すぐに、事態を納得して協力してくれるだろうか」
「すぐに、というのは難しいでしょうが、表世界から裏世界に来て、もといた世界に戻れないのだから―――、せざるを得ないかと」
「我々は、卑怯だな」
「卑怯でも、裏世界を救うことで、表世界も救えるのですよ。仕方ないことです。何と言いましても、表世界は裏世界に、裏世界は表世界に影響を与えるのですから」

表世界は現実世界のことで、裏世界は、虚像とか、パラレルワールドといった一見曖昧な世界のことだ。
詳しいことは分かっていないが、裏世界は『とある人』の中で生まれ、拡大したものだという。
西暦二三四〇年現在となっては、表世界と裏世界はコインの表裏――、要するに表裏一体の存在で、一方無くしてはもう一方は存在出来ないようになってしまっている。

だから、厄介なのだ・・・・。

裏世界が存続の危機に瀕している今、表世界も同様な状態に陥りつつあった。

第一章『光の掟』・第一話『夕暮れの大地・常夏の城』Ｐａｒｔ２

「お兄ちゃん・・・」
道路脇のアスファルトの、血が付着しているところ。
篠原綾乃の三歳違いの兄・湊生は、三年前そこで死んだ。
一見事故の例としては在りがちな――――トラックがコンビニエンスストアに突っ込むという事故で。
でも、その事故は単なる事故ではなかった。
誰も。誰も、乗っていなかったのだ。
それにも関わらず、トラックは道路を走り、突如として右折して。
歩道を歩いていた下校中の湊生を撥ね、そのまま近くのコンビニに突っ込んだ。
運転手はいなかった。
目撃者はそう訴えた。
後にトラックの持ち主は発見されたが、１００パーセント確実のアリバイがあった。
警察は轢き逃げ事件として処理し、今もなお捜索中である。
犯人など、見つかるはずが無い――――綾乃はそう思っていた。
だって。
湊生は既に何度も同じような目に遭っていたから――――
でもいつだって、心配する綾乃に「何泣きそうな顔してるんだよ。大丈夫だって」と、事故に遭った張本人のくせに、まるで何も無かったかのように笑いかけてくれたのだ。
だから、死んだのが信じられなかった。
自転車が最高速度になっている時に限って、ブレーキが利かなくなって崖スレスレのところで横転したり。
頭上に八階建てのビルから鉄骨が降り注いできたり。

本当に、そんなことはしょっちゅうで。
その都度、二人の母である明日香は気を失いそうなまでに心配していた。
無事なことに、異常なまでに安堵して。いちいち泣いた。
綾乃には、どうしても自然現象には思えなかった。
もっと、こう――――、意図的な。
そういう点で湊生は、所謂不幸体質とは明らかに異なっていた。

もう、彼はいない――――――。
綾乃だって、分かってはいる。ただ、認められないだけで。

其の時、暗闇の中で立ち尽くす綾乃の目の前に兄の姿が映った。

《待って》

駆け寄ろうと一歩踏み出す。

《待って・・・・行かないで》

距離は、一向に縮まることなく。
寧ろ、近付こうと歩いた分だけ離れていった。
だんだんとその存在が、薄れて。
記憶が、拒否するかのように湊生の存在する記憶の断片を吐き出していく。

気付けば、偶然目に留まったのが兄だっただけで誰か限定といったものではなかったらしく、他の人達も写っていた。
お父さんに、お母さん、近所の人に貰ったばかりの子犬のメイ・・・
その今までの何もかも全ての記憶が、ガラガラと崩れていった。
抜け落ちて、空のようになっていく心。
それを、綾乃は為すすべも無く受け入れるしかなかった。

（・・・・・ここは、どこ？）
目覚めた少女は、記憶を全て手放した状態だった。
表世界から裏世界に来る過程で何らかのショックが加わり、そうなることはよくある。
おそらく、七人のうち少なくとも半数はそうなっているだろう。
上半身をゆっくり起こし、自らのいる部屋全体を観察した。
綾乃の眠っていたベッドの横には、外開きの大きめの窓があり、近くにはベランダもある。部屋の中央には円形のテーブル、そこに椅子が二脚、壁際にはドレッサーやクローゼット等が備え付けられていた。
全体的に、桜色で統一されている。
いかにも、女の子の部屋っていうか。
見たことがない部屋なのは、明確だった。
「・・・・・・・！」
窓の向こう。

そこには、信じられない世界が広がっていた。
普通ならば、太陽からの光に地面が照らされているはずなのに、その真逆の光景がそこにあった。
地面が黄色ともオレンジ色とも赤色とも言える色に輝き、空の彼方は暗黒の闇だった。
まるで、太陽から宇宙を見渡しているようで。
すごく、すごく綺麗だけど。
怖くなった。
身体が震え始めて。
記憶を失い、感情に乏しくなった彼女が最初に抱いたもの、それが恐怖だった。
美しい世界への、感動ではなく。
綾乃は、不意にベッドから降りて駆け出した。
ベッドから対極的な位置にあるその部屋のドアを、乱暴に開ける。
開けっ放しのまま、近くの螺旋階段を駆け下りた。
ここは。
ここは、一体どこ。
自然と、目頭が熱くなっていく。
なんだろう、直感的にだけれど、帰れない気がして。
そうしてふと、気付く。
帰るって、いったいどこに？
脚の動きが鈍くなり、ついに止まった。
そうして、また意を決したように走り出す。
周囲に構っている暇などなくて、エプロンドレスを着た小間使いらしき女の人達に何度もぶつかったけれど、それどころではなかった。
女の人達の焦った声と、食器が赤い絨毯が敷かれた床に落ちて割れる音がしたが、それどころではなかった。

一階まで下りてきて、玄関と思われるドアを思いっきり開いた。
そうして綾乃は、目の前に広がる世界に絶句した。
窓から見えた、そのままがそこに映る。
夢では、ない――――。

「どうして、泣いているのです？」
その声に、綾乃はびくりと肩を震わせた。

第一章『光の掟』・第一話『夕暮れの大地・常夏の城』Part3

「どうして、泣いているのです？」
その声に、綾乃はびくりと肩を震わせた。
声のする方に目をやると、フードを深く被った紺色のマントの少年が少し離れたところにある巨木の根本に鎮座していた。
「・・・・・あ、私・・・・・」
言われて自分が泣いているのに初めて気付き、先程までいた建物の前にある白い階段を下りながら慌てて目尻に浮かぶ涙を拭う。
階段を下り切ったところで、立ち止まった。
少年との距離は、おそらく6～7メートル。
「何か、お辛いことでも？」
「えっと・・・・・その」
「言いたくないことであれば、仰らなくて全然構いませんけれど・・・・・、あまりにも貴女の顔が悲しそうに見えて・・・・」
どうしても、放っておけませんでした、そう言う彼の表情はフードで窺い知ることは出来ないけれど、何となく空気が柔らかくなった気がした。苦笑、しているのかもしれない。
そんな彼の姿に釣られてか、口元にほんの少し笑みを乗せ、綾乃は近寄ろうと更に一歩踏み出した。
「近寄らないで！」
少年が焦ったように叫び、その気迫に圧されて綾乃は怯えた。

記憶がなくて、頼りなくて、感情が些か機敏になっているのかもしれない。
「あっと。・・・すみません。怖がらせるつもりはなかったんです。それは申し訳なく思っていますが、本当に僕に近付いてはいけないんです」
綾乃の様子を見てとった少年が、すかさず詫びを入れる。
チカヅイテハイケナインデス・・・・・。
その拒絶の意味がさっぱりわからなくて、どうして、と問い掛けようと口を開きかけた。
が、タイミング悪く、少年の目は綾乃が先程までいた建物の方に向けられ尋ね損なってしまった。

「・・・・・『常夏の城・太陽城。そは“太陽大命神”なる者に治められし国なれば、彼の魔の国の侵略を許さずして・・・・・』」
「それは・・・・・？」
「『歴史ノ書』の各国史のこの国、太陽国の項中で最も有名な一節です」
少年の言っていることが理解出来ず、綾乃は首を傾げる。
「太陽国？」
「『その大地夕暮れに染まりしは、かくも美しからん。消えゆくものにこそ“そ”は宿れり』」
少年は、また別の一節を呟いてそっと立ち上がった。
それから、少年とは逆に階段の一番下に腰を下ろした綾乃へ視線が移される。

「貴女は・・・・・この世界の人間ではない、ですよね」

第一章『光の掟』・第一話『夕暮れの大地・常夏の城』Part4

「君は・・・・・この世界の人間じゃあない、ですよね」
ごくり、と唾を飲み込んで、聞こえるか聞こえないかというほどに小さな声でその問いに答えを返す。
「私は・・・・・・・せん」
「はい？何でしょう？」
「私は・・・・・何も知らないんです」
「・・・・・・それは・・・・・・どういうことですか？」
「何も・・・・・・覚えてなくて・・・・・・」
「名前も、家も・・・・・家族も？」
こくり、と綾乃が頷く。
少年は僅かに驚いた様子を見せたが、それは彼の中で確信へと変わる。
「じゃあやっぱりその可能性が高いです。きっと、記憶を飛ばされてしまったのでしょう」
「記憶が・・・・飛ばされた？それって・・・・？」
「近頃、いるんですよ。自分が誰か分からない、ここがどこなのか知らないという方が。でも、その人達は大体が次第に記憶を取り戻します。そうして、この世界と並行して存在する異世界が存在することが知られるようになったのです」
「異世界？」
「はい。その異世界はこちらより未来を進んでいるらしく、“表世界”と名付けられました。それに対し、こちらは“裏世界”と名付けられたのです」
「じゃあ・・・・・私は、その“表世界”ってところから来た異世界人で、こっちの世界に来る時に記憶を失くしちゃって・・・・・・

でもそれは、しばらくしたら戻る、っていうこと？」
「そういうことです」
「・・・・・・・・。」
大き過ぎる事実に、綾乃は考え込んだ。
と、突然チチチと鳴きながら一羽の鳥が少年の頭向かって飛んで来て、そのままちょこんととまった。
全身は基本黄緑色で、頭の辺りはオレンジ色。
二色のグラデーションが愛らしい、スズメ位の大きさの小鳥だった。
少年がそっと手を伸ばし小鳥を撫でると、小鳥も嬉しそうにその手に頭を擦り付けた。
「その、鳥・・・・・・」
「ああ、この子はですね、数日前出会ったんですけど・・・・・どうしてかついて来ちゃうんですよ。・・・・・ほら、クゥ。」
呼ばれて、クゥという名らしい小鳥は、差し出された少年の手に移った。
服のポケットから何やらクッキーのような焼き菓子を取出し、少年はそれを与え始める。
はた、と何かを思い出したのか綾乃の方を振り返った。
「そういえば、持ち物で何か手掛かりになるものとかは無いでしょうか」
綾乃の少し膨らんだ制服のポケットを指差す。
どうやら、自分がポケットから焼き菓子を取り出したことでその可能性に行き着いたようだ。
その意図を捉え、ポケットに手を突っ込んでごそごそと手探りで捜索を始めてすぐ、四角くて固い物体を出した。
「あ・・・・・何これ・・・・・学生証？」
「何て読むんだろう・・・・・こう・・・・おう・・・学園？・・・・・私立、皐嘔学園中等部二年Ａ組・・・・・篠原綾乃？」
そこに写る写真は、間違いなく自分のもの。

「それが、貴女の名前なのでしょうね」
「篠原・・・・・綾乃・・・・・、それが、私の名前・・・・・。記憶が無いからなのかもしれないけど・・・・・違和感無い」
「きっとそうですよ。貴女にお似合いの名です。違っていたら、記憶が戻ってから直せばいいんですよ」言って、少年が笑う。
「・・・・・・・あ、ありがとう」
少年のあまりにも直球な言葉に、思わず顔を赤らめてしまい、更にはお礼の言葉が吃ってしまう。
「綾乃・・・・さん。改めて説明します。ここは、裏世界。そしてあれは、裏世界にある太陽国の城・太陽城です。太陽国は裏世界の国々を総合統治する、二大国家の一つで、現城主は太陽国第十二代国王サフィール＝ヴァーイェルド様です。」
「これがお城・・・・・？あ！うわ、何！？」
純白の城が、太陽国の特徴である夕日のようなオレンジとも赤とも言える色の光で、幻想的な感じに染まっていく。
そんな様が、綾乃の目に映った。
「綺麗・・・・・」
「はい。」
二人は見惚れ、その場に沈黙を落とすが、不意に綾乃が俯いた。
「ねぇ、私は・・・・・どうして城の中になんていたのかな・・・・・」
けれど、少年はその問いに答えようとはしなかった。

「貴女は、これからどうするおつもりですか」
どうって・・・・・。
綾乃は明らかに不安そうな顔をした。
「やはり・・・・・。では、僕が国王陛下に取り次いで来ましょう」

「は・・・・・？そこで・・・・・・どうして国王様・・・・・？」
話が跳躍して、さっぱり分からない綾乃はポカンとしている。
「綾乃さんは、先程『どうして城の中にいたのか』と仰ってましたよね？思い出したのですが、つい先日王城にて何らかの儀式が執り行われたそうです」
「えーと、それで？」
それがどうかしたのかと言いたげな視線を送る。
「表世界から人を召喚する儀式ではないのでしょうか・・・・・と、つまりはこういうことです。」
「それが正しかったなら、私がこっちに来たのは事故なんかじゃなくって、もっとこう・・・・意図的なものがあるってこと？」
「あくまでも仮定の話ですが」と少年は付け足した。
「でもでも、城にいたのは間違いないし・・・・・・何か聞けるかもしれないんでしょ。だから国王様に会うんでしょ」
「はい。その通りです」

「我々のような“パシエンテ”へのご支援、日々感謝申し上げております、国王陛下」
「おお、レン。気にするな。当然のことをしているだけだ」
・・・・・・あの人、名前レンっていうんだ・・・・・そういえば名前聞くの忘れてたなぁ。っていうか、“パシエンテ”って何？
国王らしき男の言葉から少年の名を知るという、思わぬ形での情報入手に綾乃は内心そう呟いた。

あの後、二人は城の衛兵に国王との謁見を申し込んだ。
相手が相手なので、承諾される可能性は明らかに低いと思っていた綾乃は、『玉座の間にてお待ちです』という返答に少なからず驚いていた。
だがそれ以上に驚いたのは、少年の態度。
『謁見をお願いします』と言った時の彼は、し慣れているようで全く動じていなかった。
城の内装もよく知っていて、『こっちです』と国王の待つ玉座の間に誘導してくれたのも、衛兵ではなく彼だったのである。
で、そんな彼は今、国王に挨拶の決まり文句を並べているところだ。
一方『呼ぶまで待っててて』と言われた綾乃は少年の指示で、玉座の間のドアの隙間からこっそり話を聞いている状況である。
「ですが・・・・・その為、私は陛下にご迷惑をお掛けしている身。申し訳なく存じます」
どうやら、その“パシエンテ”というのを理由に、少年を含めた人達は何かして貰っているらしい。
玉座から下りて、片膝をついたまま悲しそうな表情を浮かべる少年の前にしゃがみ込んで、国王・サフィールは慈しむような微笑みを向け、そっと少年の頭の上に手を置いた。
「だから、気にするな。お前は賢く冷静で、何より優しい。私はそんなお前を信頼もしているのだぞ」
「ありがたきお言葉・・・・・」
「だが、レン、実は今・・・・城内で騒動が起こっているのだ。緊急の用件以外は、控えて頂きたい。また後日、いや騒ぎが収束次第使いを送るから、その時話そう。時間を取る」
「お言葉ですが陛下、その騒動・・・・・よもや、大切な客人の消息が掴めないなどでは」
待ってましたとばかりに口を挟んだ少年に、サフィールは驚きを隠せない。

更に、離れたところで聞いている綾乃も、本題に入ったことを悟り気を引き締めた。
「・・・・・・そうだ。お前は本当に勘が鋭い。隠し事も出来たものではないな」
「その客人については？」
「気付いたのは半刻ほど前だ。この広い城内を総出で捜索させたが、発見には至らなかった上に、城下に下りている可能性があると、その客人を見掛けたメイドが証言したとも報告が来ている」言いながら、サフィールは玉座に戻ろうと少年に背を向け、歩き出した。
「陛下、私の話は・・・・・その件に関わってくるのです」
「・・・・・どういうことだ？」
「お目通り頂きたい者が御座いますが、お許しを頂けますか」
問いの言葉を吐き、立ち止まったサフィールの是非を聞かずに少年は立ち上がり、綾乃が覗いているドアの方へ踵を返してまっすぐ突き進んでいく。
サフィールの方は何事かとその様を目で追って行った。
ドアが開けられ、綾乃が姿を現す。
「この方、名を篠原綾乃さんと申されます」
ただ呆然としていた国王の表情が一変した。

第一章『光の掟』・第一話『夕暮れの大地・常夏の城』Ｐａｒｔ４（後書き）

『パシエンテ』という語は存在します。意味も一緒です。
スペイン語で、『ｐａｃｉｅｎｔｅ』と書きます。

何か気になる人、もしくは先読みしたい人は検索してみて下さい。
（ネタバレですが、えーと、はっきり言います。物語に関わってきますが、一話前を書く時に即断即決な感じで出来た設定なので、この小説を書くにあたって設定した謎の中枢にはリンクしません・・・・はい。）

第一章『光の掟』・第二話『蘇る記憶・呪われた旅路』Part1（前書き）

西暦２３４０年。　表世界と相対する世界である裏世界には太陽系の惑星を模した十の国があり、裏世界の各国の“魔力持ち”は自国と表世界に存在する惑星を守護する役目を持つため、“守護神”として敬われていた。　裏世界に召喚されてしまった記憶喪失の少女・篠原綾乃は、太陽国国王の命で秘密裏に“魔力持ち”を探し、近い未来起こると予言されている戦争を阻止するため、一人の少年を伴って旅に出る。　だが、巨大で狡猾な陰謀下で運命の歯車はあまりにも残酷な方向に回り始め――――。　未来・現在・過去が全てリンクする、第三次魔法大戦ストーリー。　※他のサイトにも掲載しております。

「その子は・・・・・・！」
先程とは打って変わって、安堵した表情を見せる。
「彼女、どうやら記憶を失くしていらっしゃるようなのです。」
「記憶を・・・・・・？」
「はい」
「・・・・・なるほどな」
サフィールも少年同様、異界の者について知っているため、納得の色を示した。
それから改めて、綾乃の方を向き直る。
「私の名はサフィール＝ヴァーイェルド。この国の王だ。お前の名は・・・・・確か、綾乃・・・・・だったか」
「はい。篠原綾乃です」
少し間を置いて、「あの、陛下、先日行われたといいます儀式・・・・・召喚の儀では御座いませんか？それ以外に、私には思い当たることがありません」と少年がサフィールに問うた。
秘密事項ながら少年を信頼してか、さも隠すつもりはないというように頷く。
「そうだ。その召喚した少年少女数人の内の一人で、“太陽大命神”の、かもしれぬ娘が、綾乃、お前なのだ」
「太陽大命神かもしれない、ではなく・・・・・太陽大命神の、かもしれない・・・・・で、ございますか？」
「左様。」と、前よりも深く頷いて言った。
だが、今は肯定するだけでそれ以上言うつもりはないらしく、話題を転換させる。

「綾乃。記憶を失わせてまで呼び寄せてしまってすまない。だが、お前の住んでいた世界も、こちらの世界が危機に瀕していることでその影響を間接的だが受けている状態にある。記憶を失っている今、故郷のことなどさっぱりかもしれん。それでも、我々に協力をしては貰えないだろうか」
「それで・・・・・・いつかは、帰らせて貰えるんですか」
「勿論」
「具体的には何を？」
「旅に、出てもらうつもりだ」
「た・・・・・旅！？」
「綾乃さんを旅に・・・・・・って、護衛はどうするのですか！？」
あまりに唐突な発言で綾乃は困惑を隠せず、また綾乃が太陽大命神に関わる者だと知ったばかりの少年も、過剰な反応を返した。
「そうだな、忘れていた。確かに護衛は必要だ。それで、どうだレン」
「・・・・・何がです？」
呼ばれた意味が分からなくて、少年は首を傾げたが、次いで発せられるサフィールの言葉に全てを悟った。
「綾乃の旅の供をする気はないか」
「・・・・・だ、ダメですよ！！」
「何故だ」
サフィールの表情が曇る。
「陛下、私はパシエンテなんですよ！？」
「関係などない」
「大ありです！お考え直し下さい！」
少年が一緒なら旅もいいかな、などと考えていた綾乃は少しどころかがっかりしていた。
そんな中再び登場した知らない単語、パシエンテ。
だから、一体何、それって。
その意味が分からないままだと、以後の会話で綾乃は蚊帳の外に

なりそうな気がしてならなかったため、言い出し難いが口を開いた。
「あの・・・・・」
「どうした、綾乃」
「パシエンテって、どういう意味ですか・・・・・・？」
「一言で言えば、病人のことです。不治の病を持つ・・・・・」
「え、それってうつっ・・・・・・！」
「そのようなことはない」
「ああ、良かった・・・・・」
少年には非常に失礼にあたり申し訳ないが、心底綾乃はほっとした。
「僕の病は、“欠損病”です。罹患してしばらくは高熱が続き、回復しかけた頃に突如として記憶の一部が欠け、永遠に戻らなくなってしまうのです。失われた記憶が幼い頃のモノであればあれば、得た技術・知識が消えてしまったりし、誰か他の人と出会った時期と被ってしまった場合・・・・・その人に関わる全ての記憶が連鎖的に抹消されてしまうなどといったことも基本症状の例の一つですね。更に、滅多にないのですが、記憶領域の縮小に伴って、脳内の神経領域の圧迫による負担で全身麻痺を引き起こすことがあります。」
「何それ、聞いたことがない・・・・」と、綾乃は愕然と呟く。
「当たり前ですよ。表世界には存在しないんです。因みに、この病気の因子を持つかは遺伝で決まり、それを潜在的に保持していても発病するかはわかりません」
「得た技術と・・・・・知識？・・・・・・なら、読み書きも出来なくなることなんていうのは・・・・」
「有り得ますね。といいますか、現に知人に一人。」
ええと確か、と顎に拳を当て、少し上に視線を投げかける。
「じゃあ・・・・貴方にも、失った記憶がある？」
「あります。ですが、どうやら僕には麻痺もなく、記憶が無いからといって生活に支障はないんで軽い方です」
「それなら何故、ダメなの？」

「そうだ。問題なんて無いだろう」
サフィールもそうだそうだと言わんばかりに少年に言う。
「・・・・・・・。」
二人に追い詰められて、少年は口籠った。
「それとも、私とじゃ嫌？」
「そういう訳では・・・・・・！ただ・・・・・」
「ただ、綾乃さんは・・・・・・、太陽大命神様と縁のある者。例え異世界の方でもご身分は遥か上となりましょう。いずれは、僅かなれど表舞台に立つ時が来るやも御座いません。そんなお方が、私と共にいるのを見られますのは、避けるべきです。ただでさえ、陛下が私共に関わることを快く思っていない者も多いのです。これ以上信頼を揺るがすようなことはなさって欲しくはないのです・・・・・！」
辛そうに顔が歪む。
そんな場合ではないというのに、彼の一人称が、その言葉を向ける相手に合わせて僕と私が切り換えられていることに今更ながら綾乃は気付く。何とマメな。
少年の真面目な性格と、サフィールに対する忠誠心が覗えた。
「・・・・・レン」
自分のことを親身になって考えてくれての発言だと分かり、嬉しかったのかサフィールの口元が思わず緩む。
その様子を見て取ってから、少年は綾乃の方を向き、まっすぐ見つめた。
「言いましたよね、綾乃さん。”近付かないで下さい”と。人は、パシエンテを含む、僕らに近付く者までもを遠ざける。風当たりは確実に冷たくなる筈です。たくさんの病気が有ります故、うつる病も数多くありますが、うつるうつらないなど・・・・・彼らにとってはどうでもよいのでしょう。ただパシエンテとその関係者であれば敬遠されるのです。僕は、綾乃さんを・・・・・・そのような目に合わせたくはなかったのです」

「だから、ここに来るまでずっと私と距離を取っていたんだ・・・・・」
やっとわかった。
あの拒絶の意味は――――。
城から出て来た綾乃がたとえ偉い人と関係なくっても、きっと彼なら同じように守ろうとしていたに違いない。
会ってまだ半日も経っていないのに、彼がどんなに優しい人かわかる。
記憶が無くて自分の居場所が無くて。不安だけど・・・・彼がいてくれたら安心する。
出来ることなら・・・・・彼と一緒に、旅を。
「はい。本当に申し訳ありませんでした」
「ううん、気にしないで。私のこと考えてくれての行動だし。ありがとう。えっと・・・・・貴方の名前・・・・・は・・・・」
「なんだレン、名乗っていなかったのか」
「忘れておりました！綾乃さん、すみません。僕の名は、レウィン。レウィン＝エスティです」
「エスティ・・・・・君」
なるほど、だからその略名でレンという訳か。
おずおずと名を呼んだ綾乃に少年は微笑む。
「はい。」
「私・・・・・・貴方がついて来てくれるなら旅に出る」
「・・・・・・・綾乃さん・・・・・？さっきの話・・・・・」
「分かってるけど、貴方がいい。強かろうとなんだろうと、話したこともない人といきなり旅なんて嫌。私はこっちの世界で何とか頑張って、自分のいるべき場所にちゃんと帰りたい。今何もせずに帰って、自分の世界が侵されていくのを・・・・ただ後悔しながら呆然と見ることになるのは嫌。して後悔するならいい。しなくて後悔するのだけは、どうしても自分が許せない」
「君は本当に・・・・・出来た子だな」

「違います。ただ、我儘なだけなんです」
感心して、確かに知っている人の方が良いなと言って笑うサフィールに、綾乃は頭を振った。
「もし国への信頼がどうので国王様自身がエスティ君との旅を却下するなら、仕方ないと思った。きっと諦めてた。・・・・・でも、国王様がそれを勧めて下さる以上、一緒に行きたくて。・・・・・・・・・エスティ君、ごめんなさい。我儘・・・・過ぎるよね・・・・・」
「綾乃さん・・・・・」
「私は、貴方にお願いしたい」
どうかな、と上目遣いで問うた。

「綾乃さん、僕は・・・・・・」
本当は・・・・本当は、僕も一緒に行きたい・・・・・・。
気持ちはハッキリしてる。
けれど、決心は出来ない。
この旅は、呪われた旅。
秘密裏に出発し、存在が敵国にバレたなら即時妨害及び抹殺命令が施行される筈の旅だ。
命に関わる。
見れば、自分と同い年位らしい少女は平然としている。
分かっているのだろうか、今貴方が置かれた状況を。貴方があっさりと返答した、その度の危険度を。
危ない。恐ろしい。それなのに。
陛下――――サフィール様の様子からすると、恐らく僕が”是”と言った瞬間に綾乃さんの、僕というたった一人の護衛を引き連れた旅が近々決行されることになるだろう。
綾乃さんの”知らない人は嫌です”発言に同意していた彼だから、きっと僕以外にもう一人護衛を付けるなど考えてはいないだろう。

元よりその気だろうし。
僕には、自惚れかもしれないけれど、人並み以上の知識はあると言えるだけの自信はある。とはいえ、武術においては残念な状態で。
きっと、護衛とは名ばかりの――――寧ろ、情けないことにも逆に守られてしまう方に回りそうな気がしてならなかった。
・・・・・・だから・・・・・・だから・・・・・・。
やっぱり、一緒には・・・・・・・。
「綾乃さん、一つ・・・・・・質問させていただいてもよろしいですか？」
「何？」
「僕は・・・・・戦力にはなりません。それで、どのようにして・・・・？」
「逃げる」
「はいっ！？」
・・・・・・逃げる！？
「だから、逃げるの」
何を、そんなにあっけらかんと・・・・・！
とても重要なことなのに、彼女はさも当たり前のように言い放った。
今までそんな素振りが無かったから思わなかったのだが、綾乃さんは生来能天気な子なのだろうか。
脳裏に一抹の不安が過る。
それは、どんどんと増大していった。
「この旅が・・・・・・如何に危険か、その点は・・・・・・」
「一応、分かってはいるつもり。敢えて獣道を通る的な感じで細心の注意を払って旅を」
「余計に危ないですよ！！毒を持つ虫や植物、動物だっているんです！」
しかも、国によって気候が天と地ほど違う。
伝え聞いたり、本で読んだりして表世界の――綾乃さんが住んで

いたという世界についてはいくらか知識があるが、彼女にとってここは魔力が存在する異世界。
勝手が違うのだ。
「まあ・・・・・確かにそうだけど・・・・・・うん、大丈夫」
「何が大丈夫なんです？」
何処から来るのかわからないその自信に、レウィンは眉間に皺を寄せた。
「一人じゃないから」
綾乃は笑う。
「ですが、戦闘になれば、僕はきっと・・・・・いえ十中八九足手纏いに・・・・・！」
「レン、隣国の水星には守護神がいる。彼のところまで行けさえすれば彼が戦力になってくれる筈だ。これは――――守護神達を集めるための旅なのだからな」
「それが、旅の目的なのですか、陛下」

第一章『光の掟』・第二話『蘇る記憶・呪われた旅路』Ｐａｒｔ２（前書き）

西暦２３４０年。　表世界と相対する世界である裏世界には太陽系の惑星を模した十の国があり、裏世界の各国の“魔力持ち”は自国と表世界に存在する惑星を守護する役目を持つため、“守護神”として敬われていた。　裏世界に召喚されてしまった記憶喪失の少女・篠原綾乃は、太陽国国王の命で秘密裏に“魔力持ち”を探し、近い未来起こると予言されている戦争を阻止するため、一人の少年を伴って旅に出る。　だが、巨大で狡猾な陰謀下で運命の歯車はあまりにも残酷な方向に回り始め――――。　未来・現在・過去が全てリンクする、第三次魔法大戦ストーリー。　※他のサイトにも掲載しております。

「それが、旅の目的なのですか、陛下」
「ああ。目的を言うのが遅くなってすまない。私が各国の神官を呼び、儀式を行ったのは・・・・・それは、こちらでまだ残っている守護神達と魂を同じくする者達を召喚するためだ。そうすることで表世界に魔の手が及ぶのを防ぐと同時に、守護神達の身の安全を図ることが出来るのだ」
「では、綾乃さん以外にも召喚なさった方々が・・・・？」
驚いたような口ぶりだが、レウィンは予想はしていたのだろう、表情は少しも変えなかった。
「いる。綾乃以外は、今は皆宝玉の中で眠っている状態だ。旅が始まれば、綾乃、お前に渡すつもりでいる。守護神に出会って旅の同行、もしくは同行はせずとも協力が叶った場合は彼らに合った宝玉を手渡してやって欲しい」
レウィンは急に黙って、考え込んだ。
もしその宝玉を綾乃に託した場合、守るべきものは増える。
しかも奪われた場合・・・・・終わった、と思ってもいいかもしれないほどの。
でも・・・・・・水星国は近い。
更に他の国に比べて城が太陽国寄りにある。
ならば・・・・・・。
「水星国・・・・・そこまでなら、大丈夫かもしれません」
俯いたまま、ぽつりと言った。

少々小さめの声だったが、二人にはしっかりと届いていて、綾乃が期待に目を輝かせる。
「っていうことは・・・・・！？」
「行きます」
顔を上げた彼の口元が緩む。
相変わらず深くフードを被っているから、顔の半分ほどは見えないけれど。
「いいの！？」
「はい。よろしくお願いします、綾乃さん」
「やったー！」
綾乃が高く飛び上がる。
その嬉しそうな様子に、サフィールもにっこりと笑う。
「良かったな、綾乃」
「はい！国王様も、ありがとうございます！！」
「レウィン、承諾に礼を言う」
「そんな・・・・・。頭を下げないで下さい、陛下。私も、本当は同行したく思っていましたので無理はしていないのです」
「なら、良かった。あと、もう一つ頼みたいことがあるんだが・・・・・そっちの方も頼めるか？」
「何でしょう？」
「綾乃は記憶が無いが・・・・・話せたりしているだろう？だから、基礎的な記憶というか知識はあるのだ。だがあくまでもそれのベースは表世界のモノ。裏世界についてはさっぱりだろう」
「そうですね」
「そのまま旅に行かせるのは不安だし、無知なのは危険だ」
「私が・・・・・綾乃さんに、教えればいいんですね？」
「うむ、頼んだ」
こうして綾乃は、翌朝からレウィンのスパルタ指導の下、裏世界について勉強することが決まった。
ただ、彼も忙しい人で、もう一人宮女のクィルさんという方が勉

強には付き合ってくれるらしい。
また、そのクィルさんという人は、綾乃専用の侍女で身の回りの世話も担当してくれるということだった。
あくまで予定であり、変わるかもしれないのだが・・・・旅立つまではおよそ一か月半。
サフィールにより、昼間目覚めた、あの時の部屋へ通された綾乃はそこが自分用に用意された部屋だと教わり、夜をその部屋で過ごした。

アヤノ・・・・・・

ヤッパリ・・・・キテクレタンダナ・・・・・。

城の地下室の一角。
光も無く真っ暗なその部屋の中で、霞んだ様な声が小さく響く。
床から天井まで繋ぐ、まるでは太い柱のようなガラス製のチューブの中に、一人の少年が眠っていた。
データの如く、時々白い衣を纏った彼の全身をノイズが駆け巡る。
見れば、向こう側が透けている部分もある。
存在が曖昧で、実態ではない、ということだ。
そんな状態のまま長く眠りの中にあった少年の目が、薄く開いた。

「綾乃様！世界史のお時間でございます！」
レウィンと、男のようにゴツイ宮女のスパルタ教育が始まって四日目。
いつもは二人でか、もしくはレウィンが教えてくれるのだが、今日は用事があるらしくレウィンは城に来れないらしい。
綾乃は勉強用のテーブルに腰掛け、黙々と書物を読み耽っていた。
一通りの歴史を学ぶためである。
綾乃の服は約数十万円という超セレブ状態となっているが、それは当たり前、仮にもここは王宮だ。客人にはそれ　相応のおもてなしがある。
それよりも更に凄いのはこの宮女。
「ねェ、クィルさん。“魔力”て、具体的に何？」
一人で綾乃の世話係を難なくこなす宮女・クィルは、そうですねぇ、と言って少し考え、
「魔力を持つ者・守護神には属性と特殊能力がありますね。例えばこの太陽国の守護神・・・・それを太陽大命神というんですが、その場合は、属性は光、特殊能力は制御、時間を司ります」
「セイギョ？」
「他の守護神達の暴走を止めるためのモノですよ。・・・ただ、多くの条件があるので、有効とは言えませんけど」
聞いて、綾乃はやっぱり裏世界でも太陽は絶対的存在なんだなあ、と感じた。
今まで学習したことをまとめると、こうだ。
この世界では、”魔力”という摩訶不思議な力が存在する。
それを駆使出来るのは、数少ない人々のみで、彼らをこの世界ではまんまだが”魔力持ち”と呼ぶ。
魔力持ちは”守護神”になることがこの世界では義務付けられているという。

重ねて言うが大変人数が少なく、裏世界に存在する国全て守護神が揃うことは稀で、魔力持ちの証としては翼と、　魔力開放時の瞳と髪の変化が上げられる。

「むう・・・・」
綾乃は唸った。
本当にこの裏世界の歴史は興味深い。実に結構だ。

でも・・・・本当に魔法なんて有り得るのだろうか？

また、魔法とかって実際には無いというのは常識である。漫画やアクション映画での話は別として。
記憶が無くとも、尋常じゃないと思ってしまう。
だが、真面目で知識が多い宮女クィルまで言うのだ、嘘である訳ないだろうと綾乃は頭を抱え、この理を超越した国々の歴史書を見た。
隣には、表世界――――綾乃の住んでいたらしい世界の歴史の年表が置いてある。
二つの世界は関わりが深いため、両方を並行して学ぶ必要があるのだ。
確かに、第一次魔法大戦と第二次魔法大戦というのがある。それは、元の世界でかつてあった第一次・第二次世界大戦と同じ年にあったことであった。どうやら本当に二つの世界は連動しているようだ。他にも、革命、紛争、条約締結、大陸発見など・・・表世界であった“世界を揺るがす出来事”は、この世界で何かしらの大イベントがあった年と一致している。
二〇〇六年のところを見た時――――綾乃は数秒固まった。
《冥王星、太陽系連盟を脱退。》

「太陽系って連盟だったんだ・・・？」
「はい。綾乃様達のいた表世界で冥王星が太陽系の一つというポジションを失くした事で――――惑星の守護していた国の一つである冥王星国を外すしかなかったのです」
綾乃は、立ち上がって窓の側に寄り、窓ガラスに手をついて下を見た。
その下では、兵士達が訓練中なのだが、度々綾乃はそうして彼らを観察していたのだった。
「ずっと・・・」
「はい？」
「ずっと、思ってた。兵見て、軍備強化中っぽいなって。それに、国王様・・・・・じゃなかったお父様が昨日、『今日は武官はいない』って言ってた。・・・・・たとえ昨日一日のことだったとしても、王がその時城にいて――――武官・・・兵士が一人もいないって普通は有り得ないよね・・・・・・・」
綾乃は、城に”養女”という形で住むことになった。
そこで、サフィールは自分を”お父様”と呼ぶように綾乃へ言ったのである。
いつも訓練をしている兵達が、昨日は見えなくて。
どうしたんだろうと思って昨日の夕方にサフィールに尋ねていたのだ。
「・・・・・冥王星国が、敵に回ったんじゃないの？」
クィルは悲しそうに、深く頷いた。
「守護神の役割の一つが、言っていませんでしたが――――表世界の惑星の守護なんです。彼らは忙しく、もしものことを考えればどうしても前線で戦っていただくことが出来ません。ですから・・・・・・」
第一次・第二次魔法大戦時だけは、守護神が先陣を切って戦った。
だが、魔法大戦とは言えど、実質魔法が使える者はごく一部・守護神しかいない。例外はあるが、どちらにせよ他の兵士達は銃や戦

車、爆弾といったものでの戦いであり、守護神とその例外を除けば第一次・第二次世界大戦とさして変わらない。
クィルはそれから今年・・・２３３５年までの冥王星国の悪事について語り出した。この国―――太陽への圧力、他の国々を支配下に置くなどし、今や、地球、火星、土星、天王星は冥王星によって王族を失って敵となっていることを。
今年が何年であるかを聞いて、正直綾乃は驚いた。表世界が現在２３４０年であるところからすると、三年も後を行く（要するに、西暦２３３５年）裏世界とは時間軸が違うようだ。それでも、同じ年に対応した出来事が起こっているのならば、二つの世界はよほど結び付きが強いということだろうか。
「そういえば、外見ても線路なんてないね・・・・・」
「あ、綾乃様、ご存知です？旅は徒歩ですよ」
笑顔でクィルは言い放つ。
一瞬にして、場の空気は凍りついた。

第一章『光の掟』・第二話『蘇る記憶・呪われた旅路』Ｐａｒｔ３

裏世界に来て四週間が経過しようという頃。
向かいのソファに腰を下ろし手元の本に目を落とすレウィンに向け、綾乃はぽつりと呟いた。
「最近、少しずつ記憶が戻ってきてるの」
綾乃の声に顔を上げたレウィンは、嬉しそうに微笑んだ。
「異世界に来る過程で失ったものですから―――何らかの衝撃を受けて戻るというのとは違います。だから、前にも言いましたけど、時間の経過と共に少しずつ思い出すのです」
「全て戻る日も近いのかな・・・・」
「もう、数日内に戻るでしょう。戻り始めたら早い、とも聞きますから」
「本当!?」
綾乃は歓喜のあまり立ち上がり、身を乗り出してレウィンの両肩を掴む。
わぁっ、と突然のことでレウィンは声を上げた。
「はい」
頷いてから、急に言い辛そうに口籠らせた。
「・・・・・・失礼ですが、綾乃さん・・・・・あの・・・・その、えっと・・・・」
「なぁに?」
「あの・・・・・・」

「ほら、言って。何？」
「思い出したこと・・・・・教えて頂いてもいいですか？」
「いいけど・・・・・興味あるの？」
「はい！とっても！！表世界について知りたいんです。憧れ・・・・・ですから」
レウィンの顔色が変わった。
目が輝き、この上なく喜びを表現している。
先程まで手に握られていた小さい字だらけの分厚い本は投げ捨てられ、今は彼の隣にある。
普段大人しいレウィンの変化に、綾乃は驚いて、思わず少し仰け反った。
「憧れ？」
「そう、憧れです。僕は、ずっと表世界に憧れていたんです。もう昔のことで、きっかけは覚えていないのですが。教えて・・・・いただけますか？」
表世界の存在を知ってから、様々な書物を読み漁ってきたレウィンは、かつてないチャンスに胸を躍らせた。
今までに、何人か裏世界に来たという人がいることも認知はしているし、彼等について多少なりと知識はある。
けれど、そのことを知るのはいつも人伝か、または書物からだ。
面と向かって表世界人と話すのは初めてのこと。
最初綾乃が表世界の人であると知って、記憶が無いと聞いた時、戻り次第表世界やその世界に住む人である綾乃自身について話を聞こうと心待ちにしていたのだ。
まさか、そんな人と旅が出来ることになろうとは思いもしなかったのだけれど。
「もっちろん！！いつも裏世界のこと、教えて貰ってるんだもん。お返し。」
綾乃は自分の故郷を褒められて少しいい気になり、「あのね・・・・」と話し掛けて、不意に口を噤んだ。

「あ・・・・・でも、やっぱり無理かも・・・・・。ごめん」
「え？何が”ごめん”なのです？」
訳が分からず、レウィンは首を傾げる。
「今はまだ話せるようなことが無くって・・・・・」
「断片的だから・・・・・・ですか？」
「それもあるけど・・・・私の――家族のことばかりだから」
てへ、と後頭部に手を当てて小さく舌を出して苦笑する綾乃の言葉を、レウィンは反復した。
「綾乃さんの・・・・・ご家族・・・・・」
「うん。それは――表世界のこととはあまり関係ないと思うし」
「聞きたいです」
それも当然聞くつもりだったため、はっきり言う。
「関係・・・・なくても？」
「もし、プライベートなことは話したくないと思われるなら、仰らなくても構いません」
「そ、そんなことない！けど・・・面白くも何とも無いかな～なんて・・・・」
「そんなことはないと思います。綾乃さんがどんな家庭に生まれ、どうやって育ったのか、知りたいです」
「じゃあ、聞いてくれる？」
「はい」と、レウィンは満面の笑みを見せた。

「お？何だか楽しそうな話をしているようだな？」
綾乃が自分の世界について話し始めてしばらくして。
二人とお茶でもしたかったのか、ひょっこりとサフィールが応接間にやってきた。
「お父様！！」

「陛下！」
「何の話だ？笑い声が廊下まで聞こえたが」
にこにこしながら、ドアから近いソファの方に――――レウィンの方に近付いた。
慌ててレウィンは隣に無造作に置いた本を綾乃の座るソファとの間にある低めのテーブルの隅っこに置き換える。
どうぞこちらへ、と促されて、サフィールはレウィンの隣に腰かけた。
「それは申し訳ありません。実は、綾乃さんの表世界のご家族について話を伺っていたのです」
「ほお。それは興味深い」
公務も終わったことだし私も混ざろうかと言って、手を二回叩き、ドアの前で待たせていたらしい小間使い達を呼んだ。
小間使い達の手にはジュースや紅茶などの飲み物と、一口大のお菓子がいくつも入っている底の浅いバスケットがある。
飲めるお茶が麦茶限定で、紅茶が飲めない綾乃の前にはオレンジジュース、他二人の前には紅茶が置かれ、その中央にはお菓子のバスケットが三つ並べられる。
「わあ！！今日のお菓子も美味しそう！！マドレーヌに、クッキーに・・・・あと、マカロンにそっくりね」
「ま、ど・・・・れーぬ？」
「くっきー？まかろん？」
その単語の意味が分からず、レウィンもサフィールも疑問に思った。
そんな二人の前で遠慮の欠片も無しに焼き菓子の一つを取って口に放り込んだ綾乃は、蕩けたような顔をする。
「んんー、味も似てる！でも何か違う・・・・分量も、材料も違うからかな」
こちらの世界に来てからいろいろなものを食べさせて貰っているので、どの料理も平均的に表世界の料理と負けず劣らず美味しいと

は心底思っているのだが、綾乃はかなりの甘党なので毎日のお茶の時間に出されるお菓子の方が好物となっている。
世界が違うので、存在する動植物が違う。
だから、共通のメニューは一切ない。
どれも美味しいとはいえ、自分の世界で食べる習慣のない物にそっくりな物がテーブルに並ぶとどうも手が伸びない。
それでもクィルに半ば脅されながらだが食べてみれば、驚嘆してしまうことも多い。
ああ、こんなに美味しいんだ、と。
「さっき言っていたのは・・・・綾乃さんの世界の食べ物ですか？」
「そうなの！こっちでも食べれるなんて思わなかった！！凄く美味しい！」
「どういったものなのか、見てみたいですね、陛下？」
「うむ。綾乃の世界とこちらでは、似通ったものもあるのだろうが・・・・・やはり基本は違うのだな・・・・・そう、改めて思う」
「ですね・・・・」
ぼうっとしてると綾乃に全部食べられてしまうぞ、とサフィールがレウィンにもお菓子を食べるよう促して、苦笑しながらレウィンも食べ始めた。
失礼なその言われように、綾乃は頬を膨らませる。
それを見て取ってか、サフィールはかわすように話題を戻そうとした。
「お、話が逸れてしまったな。確か、綾乃の家族の話だったか」
「そうです、そうです！あはは、あんまり美味しくて忘れかけてました」
そう言う綾乃の頬には、お菓子が詰まっている。
「綾乃らしいな」
「お父様、それはどういうことで？」
「いや、何でも無い」
再びかわされてしまった綾乃は、少し不満有り気だった。

一方、レウィンは先程までのやり取りを傍観していたが、その会話の終わり方に思わず笑ってしまった。
「先程までの話を掻い摘んで説明致します。綾乃さんには、ご両親と、三年前に亡くなったそうですが・・・・お兄様がいらっしゃったそうです。それから、表世界にはこちらで言う学習施設である学校というものがあり、そこでさまざまなことを学ぶのですが、同じ学習施設でもこちらとは勉強内容が大きく違う、という辺りまで話しました」
「ほお・・・・。今更だが、ちゃんと綾乃の記憶は戻っているようだな。レウィン、見立てではあとどれくらいで全て思い出せそうだ？」
「数日内には。寝ている間に思い出すのが多いみたいですけど、時々どこかの記憶の映像らしいものが脳裏を過るそうです。大抵はもうしばらくかかるのですが、綾乃さんの記憶の思い出し方は比較的早いのでそれくらいだと思われます」
「数日内か・・・・・勉強の方は？」
「そちらの方も順調です。各国の情勢については後々教えるつもりですが」
レウィンが何か紙を取出し、それを見ながら答えた。
「それでよい。覚える物が多過ぎるからな」
うんうん、と何度もサフィールは頷く。
その日は、夕食の支度が出来るまで三人は表世界について至極楽しそうに話し合った。

第一章『光の掟』・第三話『虹の破片・重複せし灯火』Part1（前書き）

『僕には貴女を守る力はありません。だから、代わりにこの石が綾乃さんを守ります』

異世界の少女・綾乃はパシエンテ（不治の病を持つ者の意）の少年・レウィンと旅立つ決意をする。知識を一定以上得るまで指導を受けるべく、太陽城に滞在することになった綾乃だったが・・・・・！？

第一章『光の掟』・第三話『虹の破片・重複せし灯火』Part1

アヤノ・・・・アヤノ。

オレハ・・・・ココニイル・・・・。

「はい、全問正解です」
「よっし！！」
「よく勉強していらっしゃるようですね」
「エスティ君の教え方が上手いからだよ。勉強するのが楽しいの」
「そう言っていただけると、とても嬉しいです」
「あーもう、勉強疲れた・・・・・。レンだけの時はいいんだけど、クィルさんいると、はい勉強勉強勉強ー！！って詰め寄ってくるんだもん。疲れるよ」
想像するのが容易過ぎて、レウィンは苦笑した。
勉強用のテーブルに突っ伏した綾乃は、不意にむくりと頭だけ起こす。
そうして、視界に立ったまま勉強用の教材を先読みするレウィンを捉える。
「ねーエスティ君」
「はい？何でしょう」
「太陽城の城下町ってどんなところ？」

「賑やかで・・・・活気に満ち溢れてて。僕にとっては凄く好きな場所ですけど・・・・・急に・・・・城下町がどうかしたんですか？」
「城の小間使いさんに聞いたの。いいところだって」
綾乃は裏世界に来てからたった一度だけ城を出た。
けれど、出たのは城の門の中までだ。
その際レウィンと出会ったのだが、遠巻きに街が見えたくらいだった。
城から出て、のびのびしたいのは当たり前のことだ。
「行って・・・・みたいなあ」
「行ってみますか？」
「え・・・・いいの？」
ひょきっと、跳ね上がるようにしてものすごい勢いで起き上がった。
「陛下の許可を取って参りましょう。ずっと室内にいらっしゃると体が鈍りまってしまいますし。一息入れるということで、いかがですか？」
「行く！行きたい！！」
「けれど、いつも通り課題は出しますよ」
「うん。どうせ本一冊読んでくるようにって言うんでしょ？」
一応しっかり課題という形で釘を刺すレウィンだが、この課題はいつもと同じ。
「はい、そうです。読書好きの綾乃さんには難なく熟せるでしょう。この国――太陽国の風土記です。旅に出れは、すぐにでも必要になることでしょう。念入りに読んでおいて下さい。いつものように、それについて話し合い、内容の再確認と記述されてないことを補充しますから」
「了解。ちゃんとやる」
綾乃はその課題が結構好きだ。
翌日にあるその話し合いが、勉強開始時間より始まりが早まるの

はそのためだ。
大抵はレウィンが城に来次第始まる。
いつも勉強の本であるとは限らず、レウィンが読んで勉強になると感じた物や童話なども含まれている。
趣味が合うらしく、レウィンの選んだ本は面白くて流れるように最後まで読んでしまうものばかりだ。
勿論その全てをレウィンは読破しているので、毎回会話は弾む。
その時間は、綾乃にとってもレウィンにとっても楽しい時間となっている。
「では、許可を取ってきますから。その間に本を片付けたり資料を纏めておいて貰えますか？」
「わかった！」
課題で喜ぶのは少し可笑しいかもしれないが、どこか嬉しそうなオーラを放つ綾乃を見てレウィンも微笑んでしまう。
よほど城下町散策が楽しみなのか、綾乃はいそいそとテーブルを片付け始めた。

「わあ、これ可愛い！！」
サフィールの許可は何ともあっさり得られ、綾乃とレウィンは城下町にやってきた。
綾乃は初めてでテンションが上がり、主に装飾店に寄りたがった。
それにレウィンは嬉々としてついて行っていた・・・・・が。
「ね！これ良くない？・・・・・・ってあれ？」
オレンジの石が付いた指輪を自らの指にはめて振り返ったが、そこにレウィンの姿はなかった。
「まあ・・・・・ほんとについさっきまでいたんだし、何か買いたい物でもあったのかも。すぐ戻ってくるだろうからここでゆっくり

見せて貰っとこ」
小声で言って、綾乃はまた商品を吟味し始めた。
流石太陽国だけあって赤・黄・橙系の色のものが多い。
店の数は計り知れないほどあり、回れても三分の一程度だと思われた。
「これ、いくらだろ・・・・・４マルト？」
「お客さん、どうかしたかい？」
見兼ねた店の人が店内から出て来た。
５０代くらいの、少し体付きのゴツい女だった。
「あの、マルトって・・・・・？」
「違うよ。Ｍａｌｔって書いて、メルトって読むんだよ」
「メル・・・ト？」
「おや。通貨単位も知らないのかい。全国共通の筈なんだがねえ」
「すみません・・・・・」
女の呆れたような言い方に、綾乃は俯いて謝った。
・・・・・・と、そこによく知る声が聞こえてくる。
「４メルトは表世界で言う１００４円のことですよ。１メルトは２５１円なんです」
レウィンが小さな包みを持って綾乃のすぐ後ろに立っていた。
「中途半端だね・・・・・」
「そんなものです。本当は、２５０．８７６円ですから。そんなに上手く換算なんて出来ないものです」
言って笑みを見せる少年の姿に、女は見覚えがあった。
「あれ・・・・お前さんは・・・・・レウィンじゃないのかい？久しぶりだねえ。元気にしてたかい？」
「お久しぶりです、おばさん」
笑顔を見せるレウィンの頭を女がくしゃくしゃと撫でた。
「その子はもしかしてレウィン君の連れかい？可愛い御嬢さんだねえ」
「お、おばさん！！」

レウィンも、綾乃も照れて俯いた。
「おおっと。余計なこと言っちまったかねぇ」
「ところでエスティ君、どこに行ってたの？」
「ああ、忘れてた。・・・・・・はい、これ綾乃さんに」
持っていた包みを開け、中から取り出したものを綾乃の首につけた。
革紐に、直径1？くらいの大きさの、透明のガラスに覆われた虹の宝石が付いている。
「ペンダント・・・・？凄く綺麗・・・・・」
似合っていらっしゃいます、とレウィンも嬉しそうにしている。
「レウィン、それはまさか・・・・・」
「はい。そのまさかです。護り石のペンダントです」
「なら、またダルテさんとこ大変なことになってるだろう。お前が来ると損なのか得なのか訳が分からないってよくアヤツ言ってるよ。アタシにとっちゃ、商売上がったりなんじゃ？って思うけど」
「えへへ・・・」
突然、女がレウィンに向けてにやりと笑う。
意図がイマイチ掴めない綾乃は、超傍観者的な立場で二人を交互に見つめた。
「レウィンの知識には恐れ入るよ。今日はいいのが手に入ったのかい？」
「それなりに！」
「いくつだい？」
「そうですね、三つ、といったところですね」
「三つ！？凄いじゃないかい！！そう簡単には見つからないよ！！」
「よかったねえ、御嬢さん」
「何のこと・・・・・・ですか？その三つとかって・・・・・何が三つ何ですか？教えて下さい」
「護り石のペンダントは有名だろう？通貨の単位も知らなかったようだし・・・・・どうしたんだい？」

「え、あの・・・・・えっと・・・・・・」
「彼女、記憶喪失なのです。少しずつ思い出しているようなのですが、それらについてはまだ・・・・・・・・」と、レウィンは表世界の話に触れないようにそのことだけを事実から抽出した。
「そうかい。何か辛いことでもあったんだろう。可哀相にねえ」
「いえ・・・・・・」
「で、何なんですか？」
「この護り石のペンダントはねぇ、各国で産出される宝石から作られているんだ」
「宝石・・・・・？」
縦縞の虹のように輝くその石の一層一層は、実は原石から価値の少ない残りカスの部分を薄く加工し、外側を透明のガラスで包むことで接着させたものである。
一握りの価値の高い宝石には、魔力が宿っていることがある。
採掘技術のあまり発達していない国があるために高級であるそれを買えるのは、各国の上位層でしか有り得ない。
だが、その価値の低いものならば一般市民でも手に入るのだ。
運が良ければ、中に一度だけ魔力が使える部分が混じっていることがある。
「じゃあ・・・・・このペンダントの石の十層の内、三層に魔力が宿ってるっていうこと？」
「はい。それが先程話していた“三つ”の意味です」
「御嬢さん、レウィン君は凄いんだよ。そうやって見ただけでどれが魔力を宿してるか分かるんだ。一つでも稀なのに運がいいねえ。そんなものをあげるなんて、よほどレウィンにとって大切な人だと見える」
「お、おばさん！！からかうのはやめて頂けませんか！？」
「おおっと、怖い怖い」
「・・・・・・ったくもう」
真っ赤になって怒るレウィンが何だか無性に可愛らしくて、綾乃

はじっと見つめていた。
長話をしていたせいで日が暮れ、城まで綾乃を送り届けるとレウィンはそそくさと帰ってしまった。
心なしかフードから覗く顔が赤く染まったままだったような気がして、そのこと思い出した綾乃も頬を赤く染める。
レウィンは、いつもどこか自分のことを隠してる。
サフィールは理由を知っていたので、教えてくれたのだが、自分がパシエンテであるからということらしい。
やはりパシエンテというのはいろいろ付き纏ってくるのだ。
綾乃が心に描いている以上に。
でもそんな彼の一面が見えた気がして、何だか嬉しかった。
名前の分からぬ感情が、この日を境に綾乃の中で渦巻き始めた。

翌朝
起きてすぐ違和感を覚えた綾乃は自室に備え付けられた巨大な鏡に、自分の姿を映した。その途端、綾乃はフリーズする。
「な・・・な・・な・・っ！何これ！わ、私・・・」
映ったのは少年。顔が綾乃と瓜二つの。
セミロングだった綾乃の髪は、思いっ切りショートだった。でも、男子にしては少し長めな気がする。
性別関係無しの服をわざわざクローゼットから探し出して、それを身に着けた。
それから急いで、朝食を食べ、自室にいるだろうサフィールの元へ駈け出した。

第一章『光の掟』・第三話『虹の破片・重複せし灯火』Part1（後書き）

活動報告、これから少しずつ書いていきます。
是非見て下さい！

pixivにてキャライメージ画を掲載しているので、そちらもヨロシク！！

本当に読んで頂きありがとうございます！

第一章『光の掟』・第三話『虹の破片・重複せし灯火』Part2（前書き）

『僕には貴女を守る力はありません。だから、代わりにこの石が綾乃さんを守ります』　異世界の少女・綾乃はパシエンテ（不治の病を持つ者の意）の少年・レウィンと旅立つ決意をする。知識を一定以上得るまで指導を受けるべく、太陽城に滞在することになったが・・・・・記憶が戻り始めたある日、何と綾乃は男の子になってしまって・・・・！？

第一章『光の掟』・第三話『虹の破片・重複せし灯火』Part2

「お父様！！お父様！！綾乃です！！」
切羽詰まった声がドアの向こうにいる筈の養父に投げ掛けられる。
すぐに気付き、食事をする手を止めたサフィールは、臣下の者にドアを開けるよう命じた。
だがサフィールはふと、綾乃だと名乗ったその声が些か低く感じたような気がして――、でも気のせいだったと思い直す。
ドアが開け放たれた途端に入ってきたその人に、許可を出した本人も、そしてそれを実行に移した臣下も驚き、目を見開く。
付近にいた衛兵が、迷わず銃口を綾乃に向けた。
「姫の名を語るなど、お前はいったい何者だ！？」
ひ、姫・・・・・！？
綾乃は、銃よりも自分が姫と呼ばれた方が気になった。
確かに、養女だから姫なんだろうけど。
いつもは、綾乃様と呼ばれていたから、少し気が引けた。
「名を語るって・・・・・私、本当に綾乃です、信じて下さい！朝起きたらこうなってて・・・！」
「黙れ。そのようなこと、誰が信じるか！お前、さては、敵国の・・・・！」
「ならば、生かしてはおけん！城への不法侵入、及び国王の殺害容疑で即刻死刑を！」
「そんな！わ、私は・・・・！」

大戦争を控えているために緊張度が生半可なものではない衛兵達は、綾乃の反論を許さない。
国内に刺客が送り込まれているという情報もちらほら入っているという。
やはり来たか、という思いを誰もが抱いた。
子供が刺客、という点においては何ら不思議ではない。
油断を誘うにおいては、有りがちなことであるから。
兵の一人が抵抗を止めない綾乃の腕を掴み、部屋を出ようとしたその時。
「待て」
サフィールの一言が、その場にいる全員の動きを止めた。
「お前・・・・・本当に綾乃か・・・・・？」
「・・・・・はい」
「でも、男の子じゃないか」
半信半疑と言った感じのサフィールに、どうにか分かってもらおうと綾乃は叫ぶように言う。
「だから、朝起きたらこうなってたんです！！・・・・私にはどうしてなのかさっぱり・・・・！」
どう説明すればいいのか分からず、口を噤んだ綾乃をじっと観察して。
ふいに、王が首を傾げた。
「何かいる」
「・・・・？」
「こ、国王陛下？何かいるとは・・・・・？」
未だ綾乃の両腕を捕え、変な行動に出ないか見張る衛兵も問い掛ける。
そちらにサフィールは視線を移し、少年となった綾乃の解放を命ず。
衛兵は戸惑いを見せながらも手を放し、端に控えた。
「どうやら・・・・・お前は、確かに綾乃のようだ」

「な、なら！姫はどうしてそのような姿に！？お分かりなのですか、王！！」
黙って頷いたサフィールは、調べるような視線を再び綾乃に向けた。
「綾乃、キミは一人ではないようだな。・・・・・何かの依代にされているのではないか？」
「ま、さか、憑依されてるってことですか？」
「うむ」
魔法について齧ったことがあるから、それくらいは何となく見抜けるのだ、と自慢げに続けた。
それは間違いない。
問題は・・・・・・！
そうして二人が重視した点は、僅かにずれ合っていた。
「そ、そそそそれってゆゆゆ幽霊なんじゃ・・・・」
「吃っておるぞ。安心せい、そのまさかだ」
安心せい？
寧ろ安心出来ないんですけど！？
綾乃は全身に鳥肌が立ったのを感じた。
「私が一番言いたいのは、そんな前提的なことではない。それが誰かということだ」
「幽霊が・・・・・・誰か？」
「完全に一体化しておるな。シンクロ率が非常に高いようだ。ここまで合致出来る者は、身内や恋人など、関係が深い人でしか有り得ない・・・・・それでも有り得ないかもしれないくらいだが」
・・・・・・・・・・・あれ？
綾乃は何かに気付きそうになっていた。
幽霊。高いシンクロ率。身内や恋人など、関係が深い人。
知ってる・・・・・私、何か・・・・・心覚えがある・・・・・。

そこへ、都合良く記憶の一部が蘇る。

『綾乃・・・・・お前は、本当に俺のマネが好きだな。母さんに怒られても知らないぞ？』
『いいもん！アヤ、お兄ちゃんと一緒にいたいんだもん』
『・・・・・ったくもう』

いつも、綾乃は兄である湊生（あつき）と共にいた。
兄妹関係は良好で、お調子者で後先考えない湊生も、綾乃についてだけはかなり気を配っていたほどだった。
綾乃は、何でも湊生のマネをしたがった。
口調、行動、考え方までも。
それ以前に、生来二人は似ていたのだ。
外見もそっくりで、綾乃がもう少し身長があれば双子だと言われるかもしれないほどに。
現に、湊生が中一の時に女装した姿に、綾乃はそのまんま当てはまるのだ。
加えて、珍しい・・・・・というより新製品のプリクラ機で、性別転換加工という機能を発見して二人で撮ったことがあるが、限りなくお互いに近かった。

シンクロ率、と言われれば、彼のことを思い出す。

しかも幽霊なら、やはり死者だし・・・・・とくれば、彼の可能性は非常に高かった。

「お兄ちゃん・・・・・・？」

ゆっくり、そして深く頷いて、サフィールは肯定の意を示す。

「綾乃の兄は亡くなっていたと、言っていただろう」

「はい。・・・・・・あ！安心しろって・・・・・・まさかそういうこと？」

思い当たった事実に、綾乃は思わず納得してしまう。

「可能性は極めて高い。こういうのは、さっきも言ったが本当に身内や恋人など、関係が深い人に有りがちなんだ。悪意も見られないし、多分そうだろうなとは思っていたからな」

「死んだ・・・・・お兄ちゃんに、また・・・・会えるの？」

「それが、綾乃の兄ならば。」

サフィールに言われて喜び、テンションが明らかに高くなった。

そんな少女（今は見た目は少年だが）に、何かを言おうか言うまいかと悩んで、やがて重い口を開いて言った言葉は、予想外のものだった。

「なあ、綾乃」

「はい！何ですか？」

「その・・・・・そのまま、暫くいてもらうことは出来ないだろうか」

「え？」

理解出来ず、聞き返す。

同時に、綾乃の顔から一瞬にして笑顔が消える。

「頼む」

「い、嫌だと・・・・・言ったら・・・・？」

「強制するつもりはない。運よく、明日・・・・・・ソロンが来る

予定だしな」
「ソロン・・・・・さん？」
誰だろう。
それからどう運がいいのかもわからない綾乃は、ただただその聞き慣れない名前を反復した。
「ああ。綾乃をこちらに呼び寄せた時の神官だ。」
「ヤツなら分離は容易だろう。どうだ、頼むか？」
「はい。でも、どうしてこのままでいた方がいいんですか？」
悪さがばれた時のようにばつの悪い顔をして、肩を落としたサフィールは、
「男の子であれば、式典が執り行えるかもしれないなどと思ったのだ」と白状した。
「式典？」
「ああ。太陽大命神の守護神継承の儀を執り行う式典だ」
「何で私が？この国の守護神の人、いるんでしょ？城にずっといるのに会ったことないけど・・・・・その人にして貰えば」
そういえば、守護神であるという人には会ったことが無い。
初めは、そんな重要な人が城内をうろうろしている訳ないし、戦争が近いから、きっと誰とも接触しないような場所を選んで大切にされているのだろう。
そう思っていた。
小間使い達やクィルなどと話しても、話題に出ることはなく、聞いてみても知らないという返答だけがいつも帰ってきていた。
他言無用だから教えてくれないのかとも思ったが、そうでもないようで。
更に彼らもあったことが無いというのは、おかしいなと感じてはいたが。
それでも、いないのかと聞けばいるのだと全員口をそろえて言う。
だから、気になってはいた。
「出来ない」

「どうして？」
「彼は・・・・・存在していながら、存在していないのだから」
「存在してて、存在してない・・・・？」
ああ、だから・・・・・。
「綾乃と魂を共有する者だ。そろそろ会っておいてもいいだろう」
「その、太陽大命神になる人に、ですか？」
「そうだ」

「彼の名前はアレン。本名はアストレインだ。彼が太陽大命神だという啓示が来て異世界である表世界から呼び寄せたのだが、眠ったまま目を覚まさないでいる。更に彼は肉体を持たない。魂のみの状態だったのだ」
サフィールの部屋の、一番奥。
鍵が幾重にもかかった扉の向こうに、石造りの螺旋階段が深く続いていた。
いくらか炎が灯っているだけの中は、薄暗く足を踏み外しそうになりそうなほどだった。
そこを通るのを許されたのは、サフィールを除き、綾乃だけ。
下りながら、サフィールはその太陽の守護神について、ほんの少しだけ語った。
階段を下り切ると、そこには広い空間があり、中央には天井にまでつくほど長い、太いチューブ。
炎からの光の反射で、もしくは離れ過ぎのためにチューブの中身は見えなかった。
「近くに行こう」

「はい」
中にはたっぷりと水ではない、青っぽく僅かにとろみのある透き通った液体が入っていて。
真ん中あたりに、何か大きいものが浮かんでいるのが見えた。
「これが、太陽大命神の“魂”だ」
近付くにつれ、それが何なのかはっきりしてくる。
直径４０センチくらいの、丸い球だった。

第一章『光の掟』・第三話『虹の破片・重複せし灯火』Ｐａｒｔ２（後書き）

活動報告も、是非ご覧下さい♪

第一章『光の掟』・第三話『虹の破片・重複せし灯火』Part3（前書き）

『僕には貴女を守る力はありません。だから、代わりにこの石が綾乃さんを守ります』　異世界の少女・綾乃はパシエンテ（不治の病を持つ者の意）の少年・レウィンと旅立つ決意をする。知識を一定以上得るまで指導を受けるべく、太陽城に滞在することになったが・・・・・記憶が戻り始めたある日、何と綾乃は男の子になってしまう。綾乃に乗り移ったそれは、綾乃の実兄で・・・・！？

第一章『光の掟』・第三話『虹の破片・重複せし灯火』Part3

「来てもらって早々、頼んで悪いな」
「いえいえ。これが本職ですから」
儀式の間の中央に大きな魔法陣を描く手を休めず、神官・ソロンは端の方に設置された椅子に腰かけたサフィールに答えた。
「まだかかるか？」
「いえ、もう終わりますよ」
王の足元には、頭一つ分の大きさのぬいぐるみがあった。
それは綾乃チョイスで、空色の、少しデフォルメの入った魚のデザインのもの。
その魚のぬいぐるみに綾乃の兄である湊生を移すつもりなのである。
因みに、それは綾乃が裏世界に来て2，3日した頃、女の子の世話が出来ると喜んだ小間使い達が持って来てくれたものの中の一つだ。
ぬいぐるみの他には、どうもオーダーメイドっぽい服、髪飾り・ネックレス、アンクレットなどのアクセサリー。部屋の装飾品があった。
聞いてみれば、サフィールには既に嫁がれた三つ年下の妹君がいらっしゃって、彼女の幼い頃のものが未だたくさん城に残っているのだという。
綾乃がその贈り物を喜んだため、小間使い達も調子に乗って、そ

れらから綾乃に似合うものを見繕ってきてくれるようになった。
時々、ファッションショー状態になって疲れることもあるのだが、綾乃も多感なお年頃なだけあって服装にこだわりを持っているので、基本的に楽しくやっている。
小間使い達の平均年齢は若干高めだが、登用対象年齢幅は広く、綾乃と同い年くらいの子もいて、恋バナに花を咲かせることもある。
「お父様、本当にお兄ちゃんを移すことが出来ますか？」
「ああ、出来るとも。要は、憑き物を落とす割合でやればよい。そうだろう、ソロン」
「はい。これくらいよくやっていますね」
「つ・・・・・憑き物を、落とす・・・ですか」
湊生が完全に亡霊扱いだ。
まあ、確かに幽霊には違いないけど。
魔法の存在する世界上、表世界にも増して霊傾向は強いらしい。
ソロン神官のみならずサフィール王自身も、何度も除霊をしたことがあると堂々と言い放った。
「王！！準備が整いました！始めましょう」
「よし。綾乃、真ん中に立て」
「はい・・・・・」
恐る恐る、綾乃は魔法陣の中心に立つ。
カン
魔方陣を描いた時に使った杖を床につけ、魔法を発動させた。
光る魔法陣に向け、ソロンの呪文の詠唱が始まる。
すると、何かが前のめりに倒れ始めた。
それは自分だと、綾乃は思った。
だが、それは違った。
自分は立ったままで、それとは別の、透き通ったものが自分から分離していっていたのだ。透き通ったものは、間違いなく自分の兄。
ガタガタガタガタガタガタ！
完全に離れきったところで、地震のような揺れが生じた。

それは魔法の作用だったらしく、サフィールもソロンも反応しない。
ソロンは続けて、魚のぬいぐるみに魂を移す呪文を唱える。
彼が使う魔法は、彼の持つ魔力を根源としているのではない。というより、彼自身は何の力も持っていない。彼が今使っているのは“本の魔力”。
ソロンのような”神官”とは、その本を自在に使えるように鍛錬を積んだ者の事なのである。
だから今、ソロンは分厚い本を小脇に挟んで呪文を詠唱しているのだ。
魔法陣は、詠唱の補助的なもので、対象の指定に使うのだという。
綾乃から離れた透き通ったものが、呪文を紡ぐのに呼応して床に転がされたぬいぐるみに吸い込まれていった。
ぬいぐるみに入り込み、呪文を言い終えたとき、ぬいぐるみの目が瞬いた。
そして上昇。
どうやら飛べるらしい。
《おお？》
「お兄ちゃん！！」
《綾乃・・・・。久しぶり》
「よかった・・・・・もう一度・・・・・お兄ちゃんに会えて・・・・」
《泣くなって。お前泣き虫だな》
「あんな死に方したんだから泣くに決まってるでしょ！！お父さんもお母さんも凄かったんだから・・・・・！！」
《すまんすまん。何となく、死ぬ予感はしてたからさ。とうとう来たんだなー的な》
「とうとう来たんだな、じゃないよ！感動の再開も何もあったもんじゃない・・・・・」
また綾乃は顔をくしゃくしゃにして泣き出した。

泣くと顔がブサイクになるぞ、と言いたかったが、言ったら殴られそうだったので言葉を飲み込んだ。
《よしよし。泣くな泣くな。・・・・・・ところで、そちらサンは・・・・・っと、サフィール王か！？》
どうやら湊生は、綾乃と同化中も意識は無く、眠っていた状態だったようだ。
明らかにこの状況に驚いている。
「そうだが。どうして知っているのだ？お前は、表世界の人間だろう？」
《そうさ。綾乃の兄貴なんだから。でも、俺とサフィール王、アンタとは初めて会った訳じゃないぜ》
意味が分からないと顔に書いてあるサフィールを見て、ニッと不敵な笑みを見せる。
「ど、どういうことだ、湊生？」
《ふーん。にしても、いつもとは俺の呼び方が違うんだな？》
「いつもって・・・・・？」綾乃が問う。
「俺のこと、サフィール王は何でか“アレン”って呼んでたんだよな。名前的に頭文字の“あ”は合ってるから、おおニアピンとかって思ってたんだけど」
言って笑う魚の前に、サフィールを始め、ソロン、綾乃も全員が凍りついた。
今、何と・・・・・・？
「お兄ちゃん・・・・・何て呼ばれてるって言った？」
「だから、“アレン”。そこの王様がさー、“まだ目をお覚ましになっていないのですか、我が国の守護神、アレン”って感じでな」
バッとソロンと綾乃がサフィールの方を見る。
本当か？という目線を投げかけて。
「言った・・・・・・」
「じゃあ！？」
「お、お、お・・・・・お兄ちゃんが、太陽大命神・アストレイン

！？」
綾乃の声が、城中に響き渡った。

「まあ・・・・・なんだ。取り敢えず儀式は成功したようだな。・・・・・・綾乃も戻ったみたいだし」
「え・・・・・あ」
自らを見ると、確かに髪は前のセミロングに、身長も縮んだ気がする。
先程までそれどころではなかったため、気付かなかった。
前もって手鏡を用意していたので、右ポケットから取り出して見てみる。
・・・・・・戻った！！
湊生との分離中、普通なら自らの変化にも気付いた筈だが、その時綾乃は三年ぶりに見る兄の姿に完全に気が行ってしまっていたのだ。
そしてその後は、兄が太陽大命神だったと知って。
慌てて自室に戻り、地下室に確認に行ったサフィールが戻ってきたのはついさっきのこと。
チューブには、丸い球体どころか水も入っていなかったという。
その報告時湊生は、だから言ったじゃん、とサフィールが儀式の間を出ようとした時に言った言葉を信じて貫えず拗ねたように愚痴

を漏らす。
今もまだ、口を尖らせてそっぽを向いている。
「戻ってる・・・私、戻ってる！！」
小躍りする綾乃の隣で、腕組みをしようとした湊生が、それが出来ないことに疑問を持っていた。
何かおかしいな。ふよふよ揺れってっけど・・・・・・。
そして、自身の手と足を見た。
《な、なんじゃこりゃー！！！！！》
叫んですぐ、目が座った。
眉間に皺をよせ、明らかな犯人を凝視し、その人の名を呼ぶ。
こんなことになったのは、ヤツしかいない。
《ちょっと綾乃。喜んだり笑ったりする前に、俺がこうなった経緯を聞きたいんだけど？何で魚な訳》
湊生が実に不満そうに言った。
裏世界に来てから今の今までを手短に説明すると、何かに納得したような素振りを見せたが、その上で《お前センスないんじゃね？》と魚についてコメントした。
これに入らされる身にもなってみろ。
魚が、妙にリアルで、妙にコミカルで、変にデフォルメされていてキモかった。
「それをプリティーと言います」と、綾乃はセンスを不定されて張り合うように言った。
《な、サフィール王！！お前はセンス無しだと思うだろ！？》
「私も綾乃に賛成だ」
至って真面目に答えた。
味方だと思っていた奴が、敵の増援だと知ってがっくりと湊生は肩を落とす。
「恐れながら王、私もそう思っております」
そして、ソロンまでもが。
「特にウロコがリアルで素晴らしいぞ。肩乗りサイズという点にお

いても、誠に良き物である」
「ですよね。お父様とは意見が凄く合いますね」
「うむ」
《あーはいはい。プリチーね、プリチー》
全員に言われ、湊生の不機嫌度合いはマックスに到達した。

第一章『光の掟』・第三話『虹の破片・重複せし灯火』Part3（後書き）

次、第二章に入ります！他国編。”水の掟”です。
『水の掟』を含む以降のストーリーを、活動報告にて掲載するので
是非ご覧下さい。コメントいただけると嬉しいです！

第二章『水の掟』・第一話『太陽の果て・水源の国』Ｐａｒｔ１（前書き）

『お前には、もう王たる資格は無い』　大切な人を次々に失くした少年王から、残ったその王権までもが奪われ、新たな王家が立って早二十年。未だに、新王家は旧王家の支配を受け続けていた。

その国の守護神・テイムは、綾乃達を大いに巻き込んだ復讐計画を立てていて・・・・・・！？

第二章『水の掟』・第一話『太陽の果て・水源の国』Part1

「お前には、もう王たる資格は無い」
玉座に座る少年王を囲うように、七人の男が一斉に述べた。
「降りろ。降りねばならぬぞ、近いうちに」
「貴国の守護神が亡くなった以上、新たな任命を」
「新たな任命を」
「新たな任命を。」
新たな、任命を・・・・
少年王は耳を塞いだ。
いやだ。俺はこの国の王だ。
・・・・降りろだと？冗談じゃない。
彼は、まだ王になって間もなかった。
父からこの位を譲って貰って。
華々しい未来が待っていると思っていた。
幼い頃から、王位を継ぐのは自分であると、生れ落ちたその瞬間から――――、そのもっと前、母が自分を身籠った時から決まっていたのだ。
それなのに。
一瞬にしてその輝かしい未来は自分の手をすり抜けていった。
少年は、見えないように拳を握り締め、歯を噛み締め、男達を獣のような眼差しで睨み付けた。
お前達に俺の気持ちが解るものか。
譲れない。譲らない・・・・絶対に。この座だけは。
他の何と、引き換えにしても。

「プッ。わはははは　！　また引っ掛かっってやんの」
水晶玉を前に、そこに映ったものを見て二十歳前後の青年が笑った。
「テイム様、少しやり過ぎでは？」
「いーんだよ。オレが何のために“悪戯好き”を演じていると思ってる？・・・・全ては、これからの計画のためなんだ」
「バレたらどうするのです。あまり大きなことはなさいますな」
「・・・・・むぅ。少し控える」
「そのようにしていただけると光栄です」
テイムと呼ばれた青年は玉座から降り、手近な窓を開けて旅人達かやって来るという方角を眺めた。
それにワーム秘書も従う。
「だが、“その日”が来れば・・・・・奴らをどうにか出来る。小さい頃はずっと慕っていたなんて、今の自分からしたら笑っちゃうし・・・・虫唾が走る」
「左様でございますね。私めも、かの日・・・・・テイム様の苦しむお姿を見て辛く思っておりました。この件、最後までお付き合いさせていただきます」
「早速、頼みたいことがある」
「はい。なんなりと」
「では――――――」

「・・・・・っていうことがあって、お兄ちゃんそれ以来不機嫌でね」
《寝起き早々驚いたんだ。だって、考えてもみろ。・・・起きたら、視線が低くて、見たら魚なんだぞ。なんじゃこりゃって感じ》
「いや、でも可愛いし」
《男にカワイイってのもどうかと思うんだけど・・・・》
言い合いする二人――――もしくは、一人と一匹を前に、綾乃の隣に座るレウィン少年は笑いを堪えられず噴き出した。
アレンが綾乃と湊生に分解されて、もう三日経っていた。
そしてもうすぐ綾乃がこちらに来て一か月半。旅立ちの日が近付く。
城下町に二人で出かけた日以来、多忙により城へ来れなかったレウィンは、自分のいない間に起こった大事件についての報告を楽しそうに聞いていた。
「ケチケチうるさいデスネ、太陽大命神殿」
《オホホホホホ》
上機嫌に尾びれをヒラヒラさせた。
意外と気に入ってるんじゃない、そう心底綾乃は思った。
「・・・・・・・・・僕」
ずっと笑うだけで基本黙って二人の話に耳を傾けていたレウィンが、不意に口を開いた。
《お、なんだなんだ？開口一番、“僕”。ナルシストの傾向があります》
「お兄ちゃんは黙っといて。・・・・で、何？」
「本当は・・・・綾乃さんが旅に慣れて、その仲間が出来るまでのつもりで旅に同行しようと思っていたんです」

「・・・・・え！？そうだったの！？」
「・・・・・・・・は、はい・・・・国王にもそのように、と」
綾乃は身を乗り出した。
思わずレウィンは仰け反り、たっぷり間を取って頷く。
途端、しょんぼりした綾乃にレウィンが微笑んだ。
「だから・・・・・・当初よりも、もっと・・・長い同行を、許可願えますか？」
「う・・・・・うん！ずっと、付いてきてくれるものだと思ってたし」
「そうはしたかったのですが・・・・・その・・・・」
「ん？」
取り敢えず、ウキウキしながら綾乃がレウィンを尋問にかけたところ、想像していない答えが返ってきた。
「・・・・・・・・・僕も世界を見て回りたかったですし、綾乃さん一人ではやはり危険で、僕の知識が少しはお役にたてると思って同行をお願いしたのですか・・・・・よく考えてみましたところ、やっぱり女の子と二人で旅するのはちょっとって」
だから、そう陛下にお願いしたのです。
レウィンは顔を真っ赤に染め、言った。
・・・・・・・・・何この子、意外とどころか可愛い！！
“きゅんとくる”という言葉の意味を綾乃はこの瞬間改めて知った。
《ヘーイ、お二人さん、俺完全に蚊帳の外ですかー？》
「うん、総じて無視。最初は二人だけど、増えるし。きっと楽しい旅になるよ」
綾乃は湊生の主張を完全に無視した。
「問題も、山積みですけどね」言って、レウィンが笑う。
《まあ、何だ。最初は二人ってのに俺が頭数に入ってなかった的な？》
「うん」

綾乃の発言を思い返して突っ込んだ兄に、綾乃はさも当然というかのような返事を返す。
彼女から湊生のことを聞いていたレウィンだったが、その時想像していた凄く暖かい家庭とは大いにイメージがずれていたことを沸々と感じていた。
でもこれはこれで、楽しくていいのかもしれない。
《人でなしー！！》
人じゃないのはお前だ。
後に綾乃はそう愚痴ったという。

「でも、湊生さんが一緒っていうのは心強いです。」
半ば口喧嘩が始まりかけ、どうにか場を治めようとしたが、逆に煽る結果となる。
《おお、ということは俺も頭数に入れた結果、同行期間延長決定？ホラ見ろ、綾乃。ちったあ見習え、この人でない・・・・し》
湊生が“人でなし”を“人でない”と言い間違えて、慌てて添加の形をとって訂正した。
が、“し”が付属したために、逆に変になった。
「・・・・・確かに、人ではないですね」とレウィンは分析。
「噛んだんでしょ。・・・・・お兄ちゃん頼むから、その自分の見た目には気をつけて発言して？」
侮辱の言葉も、その状況と発言者によっては本来の意味を成し得ないことをいい加減学んで、お願いだから。
突っ込みに疲れた綾乃は反目眼で兄を見た。
気まずくなったのか、湊生は話題を変えて、「それはそうと、エスティ君、お前気に入った。すっごいピュアでさ。ほんとヨロシク

な！」
「はい。・・・・・あの、今更なのですけど、湊生さんだなんて太陽大命神ともあろう方に・・・・・・・」
「そ、そんな！気にしないで」
謝罪は、向けられた本人ではなくその妹によって許された。
勿論、その点に兄は異議あり。
《言いたいことを代わりに言ってくれたのは嬉しいんだがな？お前が言うなよ、お前が》
「だって、どうせ私のお兄ちゃんだし？太陽大命神だからって気を遣わなくていいのよ。こんなチャラけた太陽大命神、笑っちゃうし」
《おっまえ、好き放題言うなぁ。仮にも兄に向って・・・・》
今日でこのパターン何回目だろう。
二人のやり取りにまた爆笑したレウィンに釣られ、当事者達も噴き出した。
笑いが収束したところで。
「これから、よろしくお願いします。綾乃さん、お魚さん」
《あーはいはい、こちらこそ・・・って“お魚さん”！？》
「そうよ、エスティ君、一応コレでも中身人間なのよ」
《コレでもって言うなー》
ぷ、とレウィンは小さく笑って、「冗談です、湊生さん」と言い改めた。

旅出発前夜・・・
レウィンが了承してくれた旨を王に話し、一同は早速旅の準備に

取り掛かった。
アレン分離の儀式の後、湊生はというと綾乃の部屋の一角に取り付けられたクローゼットの中が部屋となった。
・・・・・そこには同居人がいる。
そこでこの度、一悶着があった。
《綾乃ォ。友達連れて行っちゃダメ？愛着ついちゃってさー》
「だめ。どうせ持つのは私なんだから」
湊生が持っているのは・・・・彼の同居人。いや、同居魚。
彼の部屋であるクローゼットとは、所謂、綾乃のために用意された人形置き場のことである。初めは少なかったのだが、綾乃が最近腕に魚のマスコットを抱いて歩き回っていたので、小間使い達は同じ魚のぬいぐるみやら犬・猫のぬいぐるみを買い漁ってきたのだ。
お陰で湊生の寝床はぬいぐるみだらけで、たまに埋まっているので綾乃が発見に苦しむことがある。
取り敢えず、埋まる中で湊生はお気に入りが出来た。
それが同型のお魚マスコットミニ版。
《ちっ。分かったよ》
「分かればよろしい」
「入っていいですか？綾乃さん、湊生さん、準備の方はどうです？出来ました？」
コンコン、とノック音がして、入室を求める声がした。
「入っていいよー。準備の方は、残念ながらあんまり進んでないけど」
「それはまた・・・・あれ、湊生さん拗ねてません？」
《聞いてくれよー、綾乃はかくかくしかじかで薄情だー兄に対して酷いんだぞ！！》
「かくかくしかじかは止めてください・・・・具体的に」
《俺の友達、旅には連れてくなって言うんだ》
「もしかして、それですか？」
《ん。》

湊生が器用にヒレを使って持っているものを見て、それを指差した。
「・・・・・・・・・・・・・」
「やっぱり置いていくべきだと思わない？」
そっとレウィンは“湊生の友達”だというマスコットを手に取り、部屋を出て行った。しばらくして戻ってきた彼の手には、ストラップが取り付けられた例のものが乗っかっていた。
「はい、どうぞ。これなら、綾乃さんのバッグに付けられますよ」
《おお！！気が利くな！綾乃、付けていいだろ！？》
「仕方ないわね。いいよ。ホラ」
綾乃がバッグを差し出し、そのチャックに湊生が取り付けた。
「どっちが上なんだか、って感じですね」
拳を口元に当てて笑うレウィンを、綾乃は感心したような目を向けた。

第二章『水の掟』・第一話『太陽の果て・水源の国』Part1（後書き）

第二章に入りました。

でも、水星国メインは第二話からになりそうです。

第一話は殆ど太陽国内の話です！

活動報告チェック、コメントの方、よろしくお願いします！

第二章『水の掟』・第一話『太陽の果て・水源の国』Ｐａｒｔ２（前書き）

『お前には、もう王たる資格は無い』大切な人を次々に失くした少年王から、残ったその王権までもが奪われ、新たな王家が立って早二十年。未だに、新王家は旧王家の支配を受け続けていた。その国の守護神・テイムは、綾乃達を大いに巻き込んだ復讐計画を立てていて・・・・・・！？

第二章『水の掟』・第一話『太陽の果て・水源の国』Ｐａｒｔ２

「服何でも貸したげるって言ったのは私だけどさ・・・・・」
出発一時間前。
綾乃はレウィンが選んで着てきた服一式を見て、絶句した。
アレン用にと、城には少年物の服はたくさん用意されていた。
それらとレウィンはサイズが同じだった上、アレンは今事実上存在していないし（魚だし）、彼の持つ服が一種類しかないということで・・・・・服をあげることにしたのだが。
「・・・ん？もしかして、似合っていませんか？」
「いや、そういう訳じゃないんだけど・・・・・。寧ろ、よく似合ってると思うんだけど、あんまりにも庶民的かなって」
彼が選んだのは、深めの緑のバンダナ、同色のタートルネックのシンプルな長袖に短パン、少し装飾のあるブーツにペンダントだった。
やはりバンダナを深めにして、目から上が見えないようになっている。
どうしてそうしているのか、聞いてはいけない気がして未だ尋ねたことの無い綾乃である。
「僕元々庶民ですし、この旅、秘密裏のもので、目立たない方がいいですし。それなら尚更です」
《そーだぜ、やっぱ身分通りの格好が一番だよな》
そう言う湊生の頭には、王冠が乗っかっている。更には、尻尾に黄金の輪っかが付いていた。

「アンタ・・・・さっきのエスティ君の話、ちゃんと聞いてた？」
《実の兄をアンタ呼ばわりって・・・・》
「目立たない方がいいって言ってんの。エスティ君のはもうちょっとお洒落してもいいとは思うけど、目立たない方がいいっていう考えには賛成。・・・・・それに、身分通りの格好って、魚の分際で偉そうに。お兄ちゃんの中じゃ、魚は元来王冠してるもんなの？」
《してる！！》
そう言い放ったぬいぐるみを殴り、王冠を奪った。
レウィンは、二人の遣り取りをいつものことだと言わんばかりに微笑んでいる。
王冠（勿論、湊生サイズの小さいもの）を小脇に抱えて、
「いったいこんな小さな王冠、どうしたの」と聞くと、
《他の人形から貰った》
どうやら、クローゼット内の人形から奪ったらしい。
「あらそう。・・・・・この金属のリング、取れないんだけど！！」
尻尾の輪っかはいくら引っ張っても抜ける兆しを見せない。
《痛い！！》
「あら、入れ物の身体で・・・・・・しかも尻尾の方まで神経通ってたのね」
わざと言って、無理矢理引っ張り続ける。
《尻尾取れる！！・・・・これは、サフィール王から直々に貰ったものなんだぞ！！》
言われた途端綾乃がパッと手を離して、心構えが無かった湊生は地面に落ちた。
「先に言ってくれればいいのに」
何も無かったかのようにレウィンと話し始めた綾乃の足元で、湊生はしばらく痛がっていた。

「案は通ったらしいな」
二十歳程度の青年が、ソファに腰を下ろした。
「はい。彼らは・・・・旅に出る、とのことでございます」
「ならいい。利用させてもらわなければならないから、協力求めに来てもらわないと困るんだよな。オレだけでは達成など出来ないし。」
自らの指にはまった厚めの指輪を見て、言った。
「奴らの動きはどうだ？また裏で密約を交わしていたりしないだろうな？」
「そのようなことが最近では二度ほどありましたが、全て破談になるよう取り計らっておきましたので、心配なさらなくてもよろしいかと」
「これからも頼む、ワーム秘書」

「綾乃様、行ってらっしゃいませ」
「行ってらっしゃいませ」
城の衛兵、小間使い達が次々に声を掛ける。
「はーいっ！！行ってきます！」
綾乃は、その後ろに湊生を抱えたレウィンを連れて、城門まで来た。
出発は三十分早くする筈だったが、行く先々で小間使いから餞別にお菓子やらパンなど、王からは裏世界共通貨幣を渡されたため、初め持って行こうと思っていた荷物の二倍以上になった。それらを除くと、野宿に対応して薄くて軽い毛布、服数着、火熾し用のマッ

チ、マントっぽいコート、薬、縄・・・取り敢えず、二人で分けて持てる程度にしていた。
これから行くのは、水星・金星・木星・海王星の四国だが、徒歩で行くためにその間の国も通る。それぞれで気候が異なるため、服も夏服・合服・冬服と、全て用意しなければならなかった。
しばらく歩いたところで、不意に綾乃が切り出した。
「・・・・・・・・ねえ」
《んあ？》
「何ですか？」
後ろを歩くレウィンと、彼のバッグの上で平泳ぎの真似をしていた魚の方を振り返って、
「・・・・・・・・・・・・・ヒマ」
「・・・・・・・・・・・・。」
《・・・・・・・・・。》
沈黙が逆に落ちた。

「仕方ないですね。じゃあ、これから行く水星国について話しておきましょうか。大まかな世界史については教えましたが、各国についてはあまり触れていないですからね」
「静かよりはいいけど、こんなトコに着てまで勉強かぁ・・・・」
《イシシシシ・・・・・》
湊生がニヤッと綾乃を笑った。
「湊生さんも聞いて下さいよ」
《・・・・・・はい》
それからレウィンは自分の知識を頭の奥の方から引っ張り出すように、訥々と語り出した。

水星は、至る所に湖を持つ“水の都”と呼ばれる国。
二十数年前、王権が移行し、現在はリコレット家が王家となっていて、世界で使用されている水の半分を賄っている国だ。
その国には、今現在レウィンが危険視しているというある問題があった。
「・・・・・・・・王権交代問題、です」
《・・・・・・・なんだそりゃ？》
「すっごく分かり易くかつ簡潔に言うと、ある王が新しく王位に着いて間の無い頃に、すぐある理由で王権交代が起こったため、退位を余儀なくされた。それで怒ってる、といったところですかね。・・・・・・・・・僕、ずっと気になっていたんですけど、王から聞くと“旅をして協力を求めに来い”って言い出したのは水星なんだそうです。それって、湊生さん、もといアレンさんという表世界から来た新たな太陽大命神に、その問題を解決してもらおうって言うんじゃないんでしょうか」
《可能性は高いな》
「そうね。・・・・・・・・でも、解決ってどうやって？」
「魔力を以って、でしょうか」
《お、レウィン鋭い！！オレも戦う気がするんだよな》
あれ、と綾乃が魚を見た。
「お兄ちゃん、今更だけど・・・・・・本人に会うまで、エスティ君って呼んでなかったっけ？」
《昨日男同士で語り合った。うん、会い通じるものがあったな。そこで、もっと親密になりましょう的な感じで、呼び方変えた。・・・・・・でも、レウィンの方は俺が仮にも守護神様だから“さん”以下の敬称はいけないってさ。寧ろ本来は“さま”であるべきなんだって言い張って》
「一般庶民と王族・・・・しかもそのトップである守護神では、身分違いにもほどがあるんですよ。湊生さんって呼ぶのもやっぱり恐れ多いっていうか」

レウィンは、呼び方は確かに湊生に対しても、綾乃に対しても“さん”で統一しているが、扱いだけは神に対するもののそれだった。分解され、今は湊生と綾乃でも、二人共を守護神と考えているのである。

綾乃も、一応太陽大命神・アレンと魂を共有する者だから、間違ってはいないし。

「・・・・・・・・・・さて、もうあと十分強くらい歩いたら、国境ですよ」

「国境！？」

「はい。表世界から来たお二人には、面白いものかもしれませんね」

《面白い・・・・・・もの？》

太陽国はもう夕暮れ時になり始めた頃。

二人と一匹は見晴らしが良い丘までやってきた。

そこからは太陽国が一望出来て、見納めな感じに、太陽城とその城下町を一通り見渡した。

《オレンジ色に染まった王国・・・・太陽国っぽい景色じゃないか？》

「そうですね・・・・」もはやレウィンは感無量でそれ以上言葉が続かない。

見たことがそもそもないのか、寧ろ見たことがあって何か感じるところがあるのか――――それは不明だが、彼は半泣きだった。

とはいえ、同じ風景を見たのは見たけれど、夕暮れの中のものは格別だと綾乃も思う。

レウィンによると、この裏世界も勿論惑星なのだが、表世界と違って、あくまで太陽国や水星国といった国の集合体で一つの星（分かり易く言うと、アメリカ合衆国や日本、イギリスなどは全て地球という星の上にある、みたいなイメージ。）になっていて、表世界の太陽とはまた異なってはいるけれど、果てしなく類似した光源の星があるらしい。

要するに、表世界の惑星の名を持ち、その惑星を守護しているだ

けで、同じ惑星として各国が裏世界に存在しているという訳ではないのだ。
綾乃は、レウィンと、その頭の上で垂れている湊生の隣に立った。
「ありがとう、ございます」
「急に何っ？」綾乃が過剰なまでに頬を赤く染めた。湊生がそれに気付いて、《ほおぉぉ》とニヤニヤしながら言う。
「綾乃さんと旅に出ることになったからこそ、今こうして僕はここにいられるんです。日々多忙で同じことの繰り返しだった僕は、このようなところに来ることはありませんでした」
照れたようにレウィンは笑って、「さ、行きましょうか。“面白いもの”は国境にあります」と先を促した。

「な、何これ！！」
国境線のそのラインを隔てて、太陽と水星で全く違っていた。
例えば地面。赤っぽい土が一面に広がった道を歩いていたのだが、きっちりその境界線を境にして草原になっていた。
空間が切れて、また異なった空間と接合されているみたいだというのが綾乃の率直な感想だった。
《面白いな。俺、裏世界にいた間はずっと太陽城ん中にいたからよー、サフィール王については詳しいけどそれ以外、外のことなんかはさっぱりだったんだよな》
「じゃあ、お兄ちゃん、エスティ君、国境越えるよ！この旅で初めて国境を越えるんだから、せっかくだから同時に一歩踏み出さない？」
「いいですね」
《あのー、綾乃さんや。》

「何、お兄さんや」
《踏み出す足を持ってない奴はどうすればいいんでしょう？》
「・・・・・・・踏み出すの止めて、ジャンプで身体全体で入る」
《了解》「わかりました」
三人は一列に並んで、身構えた。
「行くよ！！３，２，１・・・・０！！」
とりゃ、と誰かが声を上げて飛び込んだ。
水星国領土に到達！

第二章『水の掟』・第一話『太陽の果て・水源の国』Ｐａｒｔ２（後書き）

二日で一気に四話投稿とは・・・・・（苦笑）

まあ、ここの辺は前書いたのいじった感じだから早いんです。

少しずつ活動報告更新してます！是非読んで下さい。

第二章『水の掟』・第一話『太陽の果て・水源の国』Ｐａｒｔ３（前書き）

『お前には、もう王たる資格は無い』大切な人を次々に失くした少年王から、残ったその王権までもが奪われ、新たな王家が立って早二十年。未だに、新王家は旧王家の支配を受け続けていた。その国の守護神・テイムは、綾乃達を大いに巻き込んだ復讐計画を立てていて・・・・・・！？

第二章『水の掟』・第一話『太陽の果て・水源の国』Ｐａｒｔ３

「あ。おはようございます、綾乃さん」
少し早く起きて朝食の用意をしていた綾乃の元へ、近くにあったらしい小川か何かで顔を洗ったレウィンがやって来た。
昨日、水星国に入った頃にはもう暗くなっていて、そこら辺りの木の根元で、三人は毛布を身体に巻付けるようにして眠りに就いた。
綾乃がタオルを渡してやり、レウィンは笑顔で受け取って顔を拭いた。
「おはよう」
「何だか、凄く寝ちゃった気がしますねー」
「そうね。昨日は初日で疲れてたし、ランプを持ってくるのを忘れちゃったから、早く寝るしかなかったし。城にアルコールランプがあったけど、どうにかなるとか思って持って来なかったのは誤算だった」
「荷物になる、とも思ったでしょう？綾乃さんなら」
言われて、そうねえ。それに油が漏れても困るし、と空を見上げた。
入国してすぐに寝た（水星入りました→暗いです→では寝ますか、となった。）ために、あまり太陽国と比べたりはしなかったが――こうしてみると、水の都だけあって大規模の湖が転々とあって、植物や鳥類も多く存在しているようだった。
気候も穏やかで、梅雨みたいに一気に雨が降る月があるが、それを除けば常春の国だ。

太陽国は常夏だから、夏から春に戻った感じがした。
「それに、暗くなったら必要以上は無理に動かない方がいいものです。自然は危ないって言いますから」
「なるほど・・・・じゃ、日々早めに就寝ってことで」
「それがいいと思います。ところで、太陽国―水星国間の国境から、次の目的地となる金星国―水星国の国境までは少なくとも二週間はかかりますから、そのつもりでお願いします」
「二週間・・・・・じゃ、ここから水星国の城までは？」
「今の現在地・僕の立っている方向――――太陽国を背にしている状態で、太陽国を北として金星やら他の国々のある方角を南とします」
コクリ、と頷いた。
「城は東です」
「それって・・・・・・どっち？」
「・・・・・・・。あっちです」
若干現実逃避しかけている綾乃に、レウィンは指差して方角を示した。
つまりは、城経由で行くと三週間近くかかるということだ。
明らかな遠回りに、二人の間に沈黙が落ちる。
《お前ら何話してんの？メシは？》
寝坊して起きてきた湊生の前では、どんよりした雰囲気が漂っていた。
「そ、そうね！取り敢えず朝ご飯食べよう？」
「・・・・・はい」
朝食を食べ、毛布を片付けて一行は移動を開始した。

《なあ、ずっと聞きたかったんだけどさ、お二人さん》

「何？」「何ですか？」
声を掛けられ二人は足を止め、綾乃は隣を歩くレウィンの頭の上を、レウィンは顔を上げた。
レウィンの頭の上に、現在湊生は寝そべっている状態だ。
水星国は殆ど小島で成り立っており、いくつもの島を無数の橋がそれを繋ぐ形をとっている。
今彼らは、その橋の一つを渡っているところである。
《どうして・・・・・徒歩な訳？》
「あー！！それ、私も気になってた！！何で！？」
綾乃も思い出したように過剰反応し、レウィンを見た。
「えーと。そうですね。説明します。移動手段はあるんですけど、敵国の上空を通らなくちゃいけなくて。その際に動向を読まれてしまわないように、とのことです」
《ちぇー》と、不機嫌そうにごろりとレウィンの頭の上で寝返りを打つ。
「徒歩で国境超える人、少ないんじゃない？」
「まあ・・・・・そう、少ないですね」
《意味ないっていうか、余計に変なんじゃね？》
短いヒレで頬杖をついた湊生の目は、完全に据わってしまっている。
「要するに、無駄苦労・・・・・？」
「いや、無駄じゃないですって。こっちの方がばれにくいです・・・・・少しは」
「・・・・・。」《・・・・・。》
あくまで少しなんだ、と二人は思った。
バレる可能性があるならまだ徒歩の方が・・・・となるのは正しい考えだと分かってはいるのだけれど、これからの遠い道のりを思えばどうしても楽な道が欲しかった。
如何に長い旅になるかは、しっかり太陽城で勉強したから。
ともかく、城まで約三日かかる。だからこの日は、城までの距離

で三分の一の地点にある水星国最大の湖まで辿り着くことが目標だった。
初日同様何かしら話したがった綾乃に、レウィンは宮女・クィルが教え切れなかった知識と技術を教えることにした・・・・のだが。
「湊生さん、魔法・・・・・・使えます？」
《んー？・・・・・わかんねェ》
「お兄ちゃん、太陽大命神でしょ！？魔法使えるんじゃないの」
綾乃はクィルから教えられたことを思い出す。
『魔力を持つ者・守護神には属性と特殊能力がありますね。例えばこの太陽国の守護神・・・・それを太陽大命神というんですが、その場合は、属性は光、特殊能力は制御、時間を司ります』
言われた通りなら、光属性魔法が使える・・・・・筈。
期待に胸を膨らます二人に、頭をポリポリ掻いて、ケロッとした顔をして湊生は言い放った。
《わかんねェけど、多分無理》
「そう、ですか・・・・」
《少なくとも、この姿じゃあな》
「え・・・・・ということは？」
しょんぼりしかけていた二人が、目を見開いた。
「まさか、使えるかもしれないんですか！？」
《ああ。綾乃の体借りてならな》
「私の体を・・・・・それはヤダ」と、綾乃は即答。
そんな綾乃に、レウィンは苦笑した。
「あ、綾乃さん・・・・」
《ほーらな。だから出来ないって言ったんだよ。綾乃の体を借りたら、十中八九出来る。でも、練習とかしたことないし、失敗とか力が弱かったりとか、コントロール不能の暴走の可能性が付き纏うけどな》
言いながら、自分の下にいるレウィンの頭をポンポンと弱く叩く。
乗っかられているレウィンはというと、魚のぬいぐるみは比較的

軽く、最初は気にしていなかったようだが――――、歩き始めて三時間半も経てば負担に感じ始めたようで痛む首に手を当てている。
いい加減気の毒になってきた綾乃は、そんな兄をレウィンの頭から叩き落とした。
《うおっ！あっぶねーな。何すんだよ、アヤ！》
「エスティ君が重いでしょ。自分で飛んで」
綾乃は、幼い頃湊生に”アヤ”と呼ばれていた。
生前、彼は大きくなって綾乃とよばれるようになっても、たまにアヤと呼ぶことがあった。
それを思い出して、綾乃は若干の懐かしさを覚える。
《むー》
「って、魚って、飛んじゃっていいの？」
徒歩の理由に次いで、今度は綾乃からの質問。
《フライングフィッシュ――！》
「魚ですか？飛びますよ。あれ？表世界では飛ばないんですか？」
本気で驚いたようだった。
言われてみれば、さっきから視界の隅を何かが浮遊している気がする。
それは・・・・・魚だったのか。
信じたくなくて見なかったことにしていたのかのか、ただ気付かなかったのかはいいとして、現実はそれだった。
「飛ばないよー！！」
《魚は、食べるんだろうな？》
「あ、それは分かる！食べるよ。お城のお料理に出て来た！ムニエルっぽいヤツ」
「はい。その通りです」
美味しかった・・・・と回想モードに入る綾乃。
レウィンも過去何度も晩餐に呼ばれたことがあるので、ああもう一度食べたいと思った。
《ならさー、捕まえるの楽じゃね？水の中以外もうろついてるなら

さ》
「それが・・・・そうでもないんですよね。」
橋を跨ぐように魚が湖から湖へ移動しようと飛び上がった。
目の前の出来事だったため、反射的に手を伸ばした綾乃だったが、つるっと通り抜けてしまった。
「速いし・・・・・なんかぬるぬるした」
「と、いう訳なんです」
《ほー。》
湊生が魚が消えた水面を覗き込む。
澄んだ水だから、底まで見える。
そこには、たくさんの魚が泳いでいた。
「ところで、今日の昼食なんですが」
「それって・・・・・もしかしてもしかする？」
《魚？》
はい、と言って渡されたのは釣竿。
黙って受け取り、レウィンの次の行動を見ていると、朝食に食べた果物の余りを取り出していた。
その林檎に似た物を含む多種多様な果物は、水が豊富な水星国では至る所で手に入る。
しかも、所有者がいないため、タダで。
「ここの魚は、果物で釣れます」
「これ・・・・・で？」
水星国の―――もとい、裏世界では、魚は果物を食べるらしい。
綾乃も湊生も異常に感じる生態系を前に、唖然としていた。
「ほら、綾乃さん！湊生さん！夕食の分まで調達しますよ！目的地に到達するころには夜になってると思うので、今のうちに釣っておかないといけません」
レウィンはやる気十分といった感じに、袖を腕捲りして釣竿を振るった。
現在午後三時。

水星城に着くのは、あと二日と少し。

第二章『水の掟』・第一話『太陽の果て・水源の国』Ｐａｒｔ３（後書き）

活動計画に、今後の章の流れを書いてます。
（各話サブタイトルも少し公開！！）

是非ご覧下さい！（コメントを頂けると幸いです）

第二章『水の掟』・第二話『絶えた血・朽ちた王座』Part1（前書き）

『お前には、もう王たる資格は無い』大切な人を次々に失くした少年王から、残ったその王権までもが奪われ、新たな王家が立って早二十年。未だに、新王家は旧王家の支配を受け続けていた。その国の守護神・テイムは、綾乃達を大いに巻き込んだ復讐計画を立てていて・・・・・・！？

第二章『水の掟』・第二話『絶えた血・朽ちた王座』Part1

「本当に、水星国は豊かな国ですね」
ぐつぐつという美味しそうな音を立てる特製スープを掻き混ぜながら、レウィンは焼き魚担当の太陽大命神兄妹に目をやった。
身体がぬいぐるみであるがために、火から近すぎず遠すぎずの距離を保って覗い見ている湊生の様子は笑わずにはいられない。
ヤマアラシのジレンマみたいである。
現在焼かれている魚は昼間、途中飽きた湊生が離脱して昼寝する中、二人が黙々と釣り上げたもの。
その数、合計八匹。
《確かに。果物も美味いよなー》
「うん、美味しいよね・・・・おっと、エスティ君、魚そろそろ焼けるよ」
綾乃の声に、レウィンが手を止めて駆け寄ってきた。
「あ！はい。・・・・・・わあ。焼き加減いい感じですね」
《だろ。腹減った～》
ぐう～とお腹を鳴らせた湊生に、綾乃は訝しげな目線を送る。
「え？お兄ちゃん食べるの？」
《な！？ちょっと待て。どういう意味だよ！当ったり前だろ》
湊生は腕を組み、綾乃に迫るように近付く。
だが、魚に迫られても何も応える訳はなかった。
「だって共食いじゃない。ねえ、エスティ君」
「あははっ！そうですね。それで、どうします？本当に湊生さんも食べるんですか」

《レウィン、お前もかよ》
その時、少し冷たい風が巻き上がった。
焼けていく魚を常に視界に入れ、焦げないように注意しながら一旦焼き魚から離れたレウィンは綾乃を手招きし、地面に敷いたシートを飛ばないように重石をさせる。
一方自身は、皿を用意してその中にスープを注ぎ、重石をし終えた綾乃に手渡してシートの上に並べさせた。
「魚焦げてしまうので、冗談はさておき食べましょうか」
三人はシートの上に座り、日が落ちて中央の魚を焼いていた火以外の明かりの無い中夕食を取った。
裏世界の木は平均的に、木の枝が巨木でもかなり低いところから分岐しているものが多い。
だからその日は、レウィンが用意したハンモックを太く頑丈な枝に取り付けて、そこで眠ることにした。
先日寝た時は、水星国の気候が春の初め頃あたりのイメージであるが故に若干寒く、夜中に綾乃が厚く温もる布団を配って回ったということがあったので、今日は各自前以ってその布団を掛けた。

「お兄ちゃん・・・・もう、寝ちゃった？」
斜め下のレウィンのハンモックを覗き、彼と一緒に寝ている筈の兄に声を掛けた。
表世界ではないから月は無く、お蔭でおおよその時間すらわからない。
勿論月光も期待出来ず、本来は結構暗いようなのだが、意外と月

が無い分瞬く星々がちょうどいいくらいの明かりとなっている。
因みに、実際の時間的には十時以降くらいといったところだ。
《んにゃ。まだ起きてる》
隣で熟睡しているレウィンを起こさないように、小声で返す。
当のレウィンは、旅出発以前フードを深く被っていたが、出発後はバンダナを鼻が見えて目が見えないくらいまでの深さまで被っている。
そして、夜はバンダナを外す代わりにアイマスクのようなものをして寝ていた。
「ねえ」
《何だ？》
布団からそろりと抜け出し、湊生は綾乃のハンモックに移った。
綾乃が布団を少し持ち上げ、横に湊生が潜り込んだ。
「私ね、記憶全部戻ったよ」
《そっか》
「お兄ちゃんがまだ生きてた頃。私、よくお兄ちゃんの部屋に忍び込んで、一人で寝れないからって一緒に寝て貰ったよね。覚えてる？」
今みたいに、と言って、綾乃は照れたように笑う。
《俺が死んで、表世界では三年経ったんだっけ》
「うん。そうだよ」
《じゃあ、もう4，5年前か》
懐かしそうに湊生は目を細める。
「お兄ちゃんの趣味の天体観測。邪魔しちゃってたけど・・・・楽しかった。いろんな星とか、星座、惑星見たよね。彗星も見たし、日食も見たよね」
湊生の趣味は天体観測であり、“星見の会”とかなんとかっていうものに所属し、積極的に活動していた。
彼の部屋は亡くなった今も当時のまま保管されているため、相変わらずそこの本棚にはびっしり星とか宇宙に関する分厚い図鑑など

の本が詰まっている。
彼の影響で、綾乃も星を見るのは好きな方だが、そんな分厚い本を読むほどではない。
ただ、ギリシャ神話の星座エピソードの本に限っては、兄に借りて自室で読んだりすることもあった。
《見たけど・・・・・どうした、急に。表世界に戻りたくなったか？》
よしよし、と綾乃の頭を撫でた。
いつもは払われるが、少し弱気になっているからだろうか、そのようなことはしようとしなかった。
寧ろ、少し嬉しそうに見える。
「違うって言ったら嘘になるけど・・・・・私は裏世界好きだよ。留学だと思って、こっちの世界の問題が解決するまで帰るつもりはない。だって、それが私の“役割”なんだもん」
《“役割”・・・・・か。俺にもあるんだろうか》
「あるでしょ、太陽大命神殿。」
寝っころがったまま、敬礼。
《あー。そういやそうだった。そんなのあったなー》
「もう。忘れちゃいけないトコでしょ。ほんっと緊張感というものが欠けてるんだから・・・・」
《それでこそ俺だろ。お調子者で、ノーテンキの篠原湊生！》
っていうか、忘れてるんじゃなくて逃避しているのだと綾乃は認識した。
「アレン・・・・ううん、太陽大命神アストレイン＝ヴァーイェルドであるお兄ちゃんと、私の命が連動してるなんて・・・・・・不思議」
《若干違うな。命が連動してたら、俺が事故で死んだ時お前も死んでんじゃん》
「あ、そっか」と、綾乃は苦笑した。
《同じ魂を持つ存在。だから言っとくけど、こっちにもう一人の綾

乃はいねーよ》
「当たり前なんじゃ・・・・・だって、その存在がお兄ちゃんなんでしょ」
《そうだ。けど、普通は片一方の世界に魂を共有する者が、合わせて二人いたことの方が異例なんだ。しかも、俺とお前以上にそっくりさんなもんなんだぜ？》
「そうだったの！？それ気にしてなかった！」
《ちょ、綾乃！声大きい！レウィンが起きるだろ》
「おっと・・・・・むぐ」
思わず叫んだ綾乃は、ハンモックから上半身を乗り出し、レウィンの様子を覗った。
綾乃が見ている間に一回だけ寝返りを打ったが、起きることはなかった。
それを見て、綾乃は胸を撫で下ろす。
「良かった。寝てる」
《おお》
綾乃は元のように寝っころがり、天を仰いだ。
「見て。表世界よりも星がはっきり見える」
《そりゃまあ、近所のコンビニとか家とかの光があるからな・・・・》
二人の表世界での家の二軒先にはコンビニ、向かいにはそれなりの規模の塾がある。
コンビニは２４時間営業だし、塾も授業が終わっても自習とかで残っている生徒や事務処理的なもので遅くまでの仕事している先生達がいるから、１２時くらいまでは明かりが絶えない。
「何の星なのかな。・・・・・あれ、私たちが知ってる星じゃないんだよね」
《・・・・・・。》
やっぱり、綾乃は故郷が恋しいのかもしれない。
強がっているのかも。

そう考えて、“魂を同じくする者”である自分が綾乃を引き寄せてしまって、記憶まで失わせてしまっていたことを思った。
儀式を行って来させたサフィールやソロンではなく、原因は自分にあって。
湊生は押し黙り、ただ意味深な綾乃が漏らした言葉を心の中で反復させた。
が、一泊置いて言った綾乃の照れくさそうな発言に、今までの考えは全て吹き飛んでしまった。
「裏世界で・・・・・お兄ちゃんと再会出来てよかった」
《綾乃・・・・》
「自分が男の子になったのには驚いたけど」
《それなんだけどな、綾乃、お前は表世界と裏世界の時間の流れが違うのは知ってっか？》
「うん。エスティ君と世話係のクィルさんから教わったけど？」
勉強を始めた初日、クィルと初対面した日だ。
まずは表世界と裏世界の因果関係について教えてくれたっけ。
《ずっとチューブの中で眠ってた俺の魂が綾乃の体に入ったのは、俺が生きた年数、時間がちょうど綾乃のそれと合致した時じゃないのかなってさ》
「え！？でも、それって・・・・」
《基準が表世界だから、合ってるんだよ》
「そうなんだ・・・・やっぱり、お兄ちゃんと私。繋がってるんだね」と、綾乃が笑う。
《おう。俺はもう死んでて、これ以上死ねないし、映画に出てくるような魂を消滅させる装置もないし。俺は、綾乃がこっちにいる間は傍にいる》
「・・・・うん」
何だか眠たくなってきて、瞼が落ち始める。
それでも、一番言って置きたいことを言わなきゃいけない。
これからに関わってくるから。

「あのね、お兄ちゃん？」
《んー？》
「もし、必要な時が来たら」
《うん》
「私の体、使ってもいいよ」

第二章『水の掟』・第二話『絶えた血・朽ちた王座』Ｐａｒｔ１（後書き）

ｐｉｘｉｖでキャライメージを公開しています！
一番新しいのは、”旅前・旅中”。
旅前と旅中の綾乃とレウィンの服装及びキャラ自体のイメージが掴めます！
”太陽系の王様”で検索して下さい。他の同シリーズの絵もたくさんあります。

活動報告更新中！小説の最新情報とかあります！是非チェックしてみて下さい！コメントを頂けると幸いです。

第二章『水の掟』・第二話『絶えた血・朽ちた王座』Part2（前書き）

『お前には、もう王たる資格は無い』大切な人を次々に失くした少年王から、残ったその王権までもが奪われ、新たな王家が立って早二十年。未だに、新王家は旧王家の支配を受け続けていた。その国の守護神・テイムは、綾乃達を大いに巻き込んだ復讐計画を立てていて・・・・・・！？

第二章『水の掟』・第二話『絶えた血・朽ちた王座』Part2

翌日。
「やぁっと着いた・・・・・」
午後5時にしてようやく見えた水星国の城下町に、綾乃が気の抜けた声を漏らした。
「何だか疲れちゃいましたね。町に入ったら、今日はもう宿でゆっくりして、明日の午後謁見しましょうか」
「うん、そうしよ・・・・ふあぁ眠い・・・・」
綾乃の斜め掛けのバッグの上には、既に飛び疲れたらしい湊生が倒れるようにして寝ている。
時折、頑張って歩いている中暢気そうに寝ている様が恨めしく思えて、ヒレを掴んで逆さ宙吊りにしてみたりもしたけれど。
それでも湊生は睡眠を邪魔されることなく爆睡していた。
一足先にリラックスするぬいぐるみとは打って変わって。
レウィンと綾乃は目標を目前にして、よろよろする体を叱咤し、三倍速で歩き出した。

朝、彼らが泊まった宿では一騒動あった。
それは、朝食を食べに行こうとレウィンが綾乃の部屋へ誘いに行った、七時半のこと。

「綾乃さん？起きていらっしゃいます？」
ノックをしても、反応はなかった。
昨夜は、話した通り二人はさっさと夕食を取ってそのまま部屋に入った。
サフィールが手配してくれていた旅の所持金は、並々ならぬもの。
お金の管理は、まだ裏世界に不慣れで物価や通貨単位すら知らず、旅を始めて尚勉強し続けている綾乃より、裏世界に慣れ博識であるレウィンが担当するのが妥当だったため、サフィールは彼に多額の所持金を託した。
お金を持つレウィンは、綾乃の判断に従う旨を伝えた。
それをサフィールは許し、レウィンは綾乃に使用用途を尋ねたところ。
その金額さえあれば、楽に旅が出来そうなくらいだったが、綾乃は必要最低限のみ使うようにしようとレウィンに提案してきたのである。
元々同意見だったレウィンは、アッサリ承諾した。
そのため、その日とった宿は一室のみで、ベッドルームが二つあるものを選んでいた。
「綾乃さん！？綾乃さん！！」
何度呼んでも。
いくらドアを叩いても。
鍵の掛かったドアは、開く訳もなく。
《どーしたー？早く飯食いに行こうって》
レウィンと湊生が寝ていた部屋からひょっこりと姿を現した湊生の方へ、必死の形相でレウィンが振り向いた。
「綾乃さん、部屋にいる筈なのに・・・・・声を掛けても・・・・・何にも答えてくれないのです！！」
鍵も掛かってるし、どうしようもなくて。
《綾乃―？おい綾乃ォー？》
「綾乃さん！！・・・・・湊生さん、どうしましょう！？」

《落ち着け。》
落ち着けなんていられないですよ、と言って彼らしくなくおろおろするレウィンとは裏腹に、湊生は完全に落ち着き払っている。
旅の荷物の中から綾乃のヘアピンを一本取出し、パキンと二つに折ってカギ穴に差し込んだ。
器用にヘアピンを操作して、一分弱。
ガチャリと音がした。
《お》
「開きました！？」
《開いた》
「っ！綾乃さん！！」
叫んで、ドアを勢いよく開く。
そこで見た光景に、レウィンは息を飲む。
ベッドの傍に、ぐったりと綾乃が蹲っていた。
一瞬固まっていたレウィンだが、すぐさま駆け寄って抱き起す。
顔色を窺えば、真っ赤で額に汗も滲んでいる。
「大丈夫ですか！？」
抱き上げ、ベッドに寝かせる。
《相当参ってるな。レウィン、氷水と薄手のタオルを頼めるか？俺はこんな体だから出来そうにないんだ》
「はい。すぐに用意致します。綾乃さんを看ていて下さいね」
《おうよ。頼む》
やっといつもの冷静な彼に戻り始めたレウィンは、湊生の指示通りのものを探して部屋を出て行った。
《これはヤバいな。呪いの部類だ・・・・・。くそっ・・・・・・》
レウィンとは逆に、先程とは打って変わって辛そうな顔をして、悪態をついた。

「少しは楽になったでしょうか？」
額に冷たく濡れたタオルを乗せ、別のタオルで汗を拭き取る。
汗をかいているだろうから、本当は服を着替えさせるべきなのだろうけど、流石に相手は女の子なのでそれは出来ず、出来るだけ汗を拭った。
《ああ、多分》
言いながらも、湊生はそうは思っていなかった。
おそらく、言いたかったのはこれ。
“ああ、多分駄目だろう。原因を絶たない限りな。”
空中を泳ぐ彼の目線も、泳いでいる。
それに気付いたレウィンは、湊生の尻尾を軽く摘まんだ。
湊生は、何だ？と言わんばかりにレウィンを見る。
「嘘・・・・・なんですね」
《俺って嘘下手だな》と、湊生は思わず苦笑した。
「で、本当のところは？」
《非常にまずい。これは呪いだ》
「呪いですか？」
《かけられたのが強い守護神なら、打ち破れるもの。ハッキリ言って、俺にかけられていたなら何とも無かった筈だったんだよ》
魚にかける奴なんていないだろうけどな。
おそらく、死には至らずとも激しい衰弱は免れないだろう。
そう、おそらくは。

「ワーム」

ティーカップに紅茶を注いでいたワーム秘書は、呼ばれて俯いていた顔を上げた。
「何でしょうか、テイム様」
「別件の方、手配通りにしてくれたんだろうな？」
「はい。今頃は・・・・きっと」
カップがテイムの執務机にそっと置かれる。
そのカップに口を付け、僅かに飲んだ彼の口元には、怪しい笑みが形作られていた。
「使えるなら手駒に。使えないならカスだ」

「うっ、けほ・・・・」
綾乃が咳き込み、近くの椅子で看病しつつ分厚い本を読んでいたレウィンが焦って近寄った。
支えながら上半身を起こして呼吸し易くし、緩和薬を飲ませる。
それから何度も背中を優しく擦ってやった。
「大丈夫ですか？」
体調不良であるというのに、綾乃は密着するレウィンに気がいって仕方なかった。
そして少年であるというのに、彼からは甘い匂いがする。
優しくて、温かな、彼の。
どうしてか聞いたことがあったが、レウィン自身思い当たることはないという。
綾乃は鈍感な方ではない。
だから、彼女自身、あの太陽国で城下町に二人で出かけた日以来自分の中で渦巻く感情の名を理解している。

彼を意識しまいとしても、それは不可能な領域まで達していた。
まだ出会って、二月にも満たないというのに。
「う、うん・・・・今日はいつもより少しマシかな」
レウィンが心配そうに顔を覗き込んで。
過剰に彼を意識する綾乃は、発熱しているからも体温が高くて顔が赤いのは当たり前のことだが、それとは違う理由で顔を赤らめて俯いた。
「本当・・・・ですか？」
「やだ、そんな心配そうな顔をしないで」
「綾乃さん・・・・・」
「ごめんね、本当はこっちに来て次の日に謁見しに行こうって言ってたのに・・・・・もう、一週間、経っちゃって・・・・」
そう、もう水星国の城下町に着いてから一週間も経つ。
その間、ずっと綾乃の具合は悪い。
レウィンと湊生はそれが呪いから来るものであると分かっているが、当の本人は、表世界には無い裏世界特有の――――レウィンの欠損病みたいな――――ものであると、思い込んでいるようだ。
彼女の前でのみ平生を保つ二人からは、その状態の深刻さが窺えない。
だからか、綾乃は長引いてるな程度にしか思っていないのである。
「そんな・・・・気にしないで下さい！」
「何だかお互い励まし合いみたいな感じだね」
苦笑する綾乃に釣られ、レウィンまで口元を緩ませた。

第二章『水の掟』・第二話『絶えた血・朽ちた王座』Ｐａｒｔ２（後書き）

ちょくちょく活動報告を更新してます！

今後のこの「太陽系の王様」についての情報が書かれていたりします！

是非読んでみて下さい♪コメントを頂けたら嬉しいです！

第二章『水の掟』・第二話『絶えた血・朽ちた王座』Part3（前書き）

『お前には、もう王たる資格は無い』大切な人を次々に失くした少年王から、残ったその王権までもが奪われ、新たな王家が立って早二十年。未だに、新王家は旧王家の支配を受け続けていた。その国の守護神・テイムは、綾乃達を大いに巻き込んだ復讐計画を立てていて・・・・・・！？

「何だかお互い励まし合いみたいな感じだね」
苦笑する綾乃に釣られ、レウィンまで口元を緩ませた。
・・・・その時。
「！・・・・・うう、頭痛い・・・」
急に綾乃が頭を抱え込んで、悲鳴のような声を上げる。
その頭痛はどんどん酷くなって、刺すような痛みから、頭が割れてしまうような感覚に襲われた。
「頭・・・・割れそうっ・・・・！」
「大丈夫ですか！？」
「痛い痛い痛いっ・・・・・・！」
「あ、綾乃さん・・・・・！」
その痛みを変わってあげられたら、とレウィンは思う。
綾乃の痛がり方は尋常ではなかった。
目尻に涙を浮かべ、ただ悲鳴交じりの言葉を漏らすだけ。
何か出来ることはないか必死な顔で周囲を見回したところ、室のドレッサーの上に大切そうに置かれた小箱に目を留めた。
「もしかして・・・・・！」
立ち上がって手に取り、開いたその小箱の中には、レウィンの予想通りのものが入っていた。
それはあの城下町に行った時、自分が綾乃にプレゼントしたもの。
革紐で作られたそれの先端には、直径１？くらいの大きさの透明の硝子に包まれた虹色の石が付いている。

各国の宝石の廃材を重ねて接着し、丸く削ったもので、因みに手ごろな値段で手に入るものだ。
このペンダントは大変な人気商品で、その売りは一回だけ魔法が持ち主を守る時に発動するかもしれないという半伝説的な商品。
自分の見立てによると、今自らの手の中にあるペンダントは珍しくどれか分からないけれど、十層の内三層が魔力を秘めた物。
もし、第三層目の金星国産出の石が魔力を持つものであれば。
金星国守護神が持つ“癒し”が使える。
その可能性を・・・・・！
「綾乃さん！これ、首に掛けて下さい！もしかしたら・・・・・！」
痛みに耐えるので精一杯の綾乃はペンダントを受け取るどころではなかったため、レウィンがペンダントを綾乃につけた。
レウィンの手が、ペンダントから離れたその刹那。
「・・・・・っ！？」
その虹色の石が閃光を帯び、やがて収束した。
あまりの眩しさに思わず目を閉じたレウィンが恐る恐る目を開けると、綾乃の身体がぐらりと傾き、ベッドに倒れこんだ。
ピシッ
音を立てたのは、綾乃の胸元で輝くペンダントの先端。
虹色の玉の一部にヒビが入っていた。
あともう二回使えば、球の部分は綺麗に砕けるだろう。
でも、取り敢えずは。
「良かった・・・・・。“癒し”あったみたいですね」
倒れた綾乃の顔色は、先程までとは明らかに違う。
苦しみ始めて青白くなった彼女の顔の、その頬に赤みがさす。
瞼が閉じられてはいるが、規則正しい寝息が聞こえる今、彼女はただ寝ているだけだろう。
「無力にも、僕には貴女を守る力はありません。その代わりに、この石が綾乃さんを守ります。だから・・・・・だから、安心して眠って下さい」

乱れた綾乃前髪を両脇に払い、布団を整える。
「頼りないかもしれませんけど、僕ここにいますから」
安堵したレウィンは、気が抜けてベッドの傍に膝をつき、突っ伏すような形で眠ってしまった。

《おーい、レウィン、交代・・・・・・って、んん？》
一時間ほどして、綾乃の看病を代わろうと室に入ってきた湊生は、そこに広がる光景に目を細めた。
《二人とも気持ち良さそうに寝てんな。しかも、呪いが解かれてる》
そして、綾乃の首に掛かったペンダントに気付く。
《これの・・・・・・お蔭、か》
何だそのペンダント、と太陽城を立とうと準備していた時湊生は綾乃に聞いた。
綾乃は丁寧にペンダントについて話してくれた。
その時点で、湊生は気付いていた。

なぁ、綾乃？お前―――レウィンのこと、好きなんだろ？

自分の知る限りでは、きっと綾乃はこれが初恋。
優しく見守ってやりたいところだが。
その恋が、成就する筈もないことを、湊生は知っている。
レウィン側ではない、そう、今まさに彼に恋する綾乃、その人自身の問題で。
この旅を、続けるのならば。

まだ朝にしては少し早い時間。
そのタイミングで綾乃は目覚めた。
「よく寝た・・・・・・もう体も大丈夫みたい・・・・・・あ」
軽く反対側に寝返りを打った綾乃は、隣でベッドに突っ伏した形で眠っているレウィンに顔を少し赤らめた。
不意に、レウィンの身体が僅かに揺れ、バンダナで隠れてしまっている目が開いた。
「ん・・・・」
「おはよう、エスティ君」
「お・・・・・おはようございます」
寝ぼけた声で挨拶をしたレウィンは、自身の体に掛けられているものを見て、僅かに驚いた素振りを見せた。
「あれ・・・・・タオルケットがどうして・・・・・もしかして、綾乃さんですか？」
「ううん、違う。私、今起きたとこだもん。多分・・・・」
言って、綾乃はレウィンの頭上を指差した。
そういえば、何だか重い気がする。
自分では見えないため、レウィンは手を伸ばして触れてみた。
ぬいぐるみ？
「湊生さん・・・・・？」
「じゃないかな？」
「そうかもしれないですね」言って、レウィンが笑う。
「エスティ君」
「はい？」
「看病してくれて、ありがとうね？」

「はい。綾乃さんは、もう大丈夫ですか？」
「大丈夫。元気一杯だよ。だから、今日はお城に謁見しに行こう！」
元気が有り余っているかのようにガッツポーズを決める綾乃に、若干レウィンは不安げな顔を向けた。
「病み上がりですよ？」
「うん！遅れを取り戻さなきゃ！」
飛び起きて、室内に取り付けられた洗面台で顔を洗う。
フェイスタオルで顔の水分を拭った後、またベッドの方に戻ってきた。
着替えますか？と、部屋を出ようと腰を浮かせようとするレウィンに動かないよう言い、その頭の上の物体のヒレを摘まむ。
が、摘まんだくらいで反応する訳もなく。
彼の偉大な睡眠力には閉口する。
「お兄ちゃん、起きて」
《あと五分～》
「起きてってばー」
《あと十分～》
「起きろー」
《あと十五分～》
なかなか起きず、次第に増えていく時間に綾乃は大きく息を吸い込んだ。
「寝るな！！起きなさ―いっ！！！！」
湊生は即座に覚醒し、動いたレウィンの頭から転がり落ちた。

「謁見の申し込み？」

書類に目を通し、印をつくテイムは、めんどくさそうに反復した。
「はい」
「ヤツらか？」
「その通りでございます。あの娘も」
ワーム秘書の言葉にテイムは目を鋭く光らせた。
「通せ」
「あの呪い・・・・・無事に解けたみたいですねテイム様」
「でなければ困るんだよ。でなけりゃ、駒として使えないだろ」
また一枚印を押し終えて横の山に乗せる。
その手を不意に止め、ワーム秘書の方を見る。
「さあ、これから始まるぞ・・・・アイツへの復讐が」

第二章『水の掟』・第二話『絶えた血・朽ちた王座』Part3（後書き）

毎回毎回書いていますが、活動報告を是非ご覧下さい。

次は第三話に入ります。

第二章『水の掟』・第三話『悪魔の口付け・獣の策略』Part1（前書き）

『お前には、もう王たる資格は無い』大切な人を次々に失くした少年王から、残ったその王権までもが奪われ、新たな王家が立って早二十年。未だに、新王家は旧王家の支配を受け続けていた。その国の守護神・テイムは、綾乃達を大いに巻き込んだ復讐計画を立てていて・・・・・・！？

（※タイトルの”獣”は”けもの”ではなく”ケダモノ”と読みます。）

第二章『水の掟』・第三話『悪魔の口付け・獣の策略』Part1

「分かりましたか？つまりはそういうことなんです」
水星国守護神に謁見する前に、レウィンはもう一度、今度は前よりも詳しく水星国の王権交代問題について綾乃と湊生に説明した。
裏世界では、表世界とは違ったシステムがある。
そもそも王家とは、守護神を輩出した家のことで、そこから国王が選ばれる。
守護神は三百年ほど生きるもので、その一族内に守護神がいる期間だけ国王を立たせることが出来るのというのが決まりだ。
守護神が死せば、自ずと王家は交代となる。
新王家・リコレット家は、旧王家・コルトヴァール家に支配された王家。
元々公爵家であるコルトヴァール家の現当主は、両親の死（暗殺という説が最も有力）に際してまだ十代半ばにして王位につくことになった。
だが既にその家が輩出した守護神は老いていて、彼が王になって半年で亡くなってしまった。
王権を剥奪され、全てを失ったことに絶望した彼は、預言により次に選ばれたリコレット家の爵位が子爵と低いのをいいことに裏で操作し、今では実質的な権力者という立場手にしている。
有無を言わせないようにするために、守護神以外のリコレット家とその血縁関係にある者達は皆殺しにされたというのは有名な話だ。
「なるほどね」
《てか、水星国は貴族制なんだな》

「あ、そうだね。エスティ君子爵だの公爵だの言ってたし」
「その通りです。裏世界は完全独立自治制を導入してまして、国によって統治制度は全く違うんですよ。王国じゃなくて帝国だったりするところもある、ということです」
《ほお～》
「・・・・・・ねえ、エスティ君」
「はい？何でしょう」
「協力、あっさりしてくれると思ってる？私は、無理だろうなーって思ってるんだけど」
「まさか。僕だってそうは思っていませんよ？」
当然と言わんばかりに答えたレウィンに、綾乃は若干拍子抜けしたが、納得もした。
頭脳戦に長けたレウィンがそう安易な考え方をする筈がない。
「水星国守護神は“ゲーム好き”というのが専らの噂ですから。何かあるだろうというのは想定済みです。あくまでも民草が語る噂故、信憑性に欠けるように思われるかもしれません。ですが・・・・・逆に、貴族が知らぬようなことまでも知っていたりするのです。特にこの、水星国では」
倒置法が使われた意味深な言葉を放ち、レウィンは押し黙った。

「それじゃあ、君が太陽大命神と魂を同じくする者？」
テイム―――本名、テイスラム＝リコレットである青年は、まるで品定めするかのように、目の前でレウィンを真似て片膝をつく綾乃を凝視している。
その面持ちから、綾乃は自分は蔑まれているのではないかと疑ってしまう。
気圧されて、その何かしらの圧迫感から仰け反ってしまいそうに

なるほど。
「え、えっと、その・・・・・・・た、多分・・・・・・私のこと・・・・です」
口を開けば、紡ごうとする言葉は途切れ途切れで。
彼の第一印象は、“怖い”、それに尽きた。
綾乃の返事に、テイムは「ふーん」と表情を一切変えずに言った。
「報告は受けている。お前達、名は？」
「わ・・・・・私は」
吃ってしまう綾乃とは打って変わって、見られていないレウィンにはテイムからの圧力は一切無いようだった。
何かに怯えたような綾乃に、レウィンは軽く擦るように背中に手を当てた。
「大丈夫ですよ。・・・・・テイム様、こちらは篠原綾乃さんです」
「ふむ・・・・・そういうお前は、見掛けたことがある気がするが」
「はい、一度テイム様が太陽国の王城にいらした際に。覚えていて下さるとは光栄です。私の名は、レウィン。レウィン＝エスティと申します」
名乗ったその名前に、テイムは見覚えがあった。
レウィン、レウィンと名を繰り返して呟き、記憶の奥深くに眠ったそれを思い出そうとする。
と、急にポンと手を叩いた。
「レウィン・・・・・そうか、思い出したぞ。お前、確かパシエンテだったな」
「・・・・・・・はい」
少し不快を露わにしたレウィンは、それでも肯定した。
「そう気にしなくていい。嫌悪して言ったつもりはないし。サフィール殿が、可愛がっているという話を耳にしてて。っと、本題についてだが・・・・・悪いが、レウィンは席を外して貰えるか？向こうでワーム秘書が、紅茶とちょっとしたお菓子を用意している筈だからそれを」

「はい。分かりました。では綾乃さん、後程。・・・・・失礼致します」
「うん」

「呪いが解けるくらいは魔力持ってるらしいな」
レウィンが部屋を出て、その扉が閉まった瞬間、テイムは訳の分からないことを言いながらにやりと笑った。
「・・・・・・・？」
「それにしても、表世界から来たヤツだって皆言うからどんな奴かと思ったけど・・・・・・・」
近付いてきて、すぐ前で立ち止まり、しゃがんでいる綾乃のくいっと顔を上げさせた。
表情が、口調が。
一瞬にして・・・・・変わった。
先程まで綾乃だけが感じていた恐怖は、恐らく彼の本性だったのではないだろうか。
「こーんな間抜けな奴だったとは。ガッカリ」
「え・・・・」
「まあいいさ。魔力さえあって、俺の役に立てばそれでいいんだから」
「魔力・・・・・そんなもの・・・・」
持ってないし、何の事？と聞こうとするも、テイムは遮って問い詰める。
「持ってるだろ？嘘ついて騙しても駄目だぞ」
傍らのバッグの中で人形のふりして静かにしている湊生は、イライラを抑えるので必死だった。

湊生は綾乃の呪いが解けた理由も、彼女が苦しんでいた先日の件の病気の原因が呪いで――――、おそらくそれを行ったのが今妹の目の前に立つ男であるだろうことも知っている。
ずっと警戒していたが、自分は今魚の姿で。
もし何かあった時・・・・どうも出来ない。
レウィンがいるから安心と思っていたが、彼は先刻部屋を出て行ってしまった。
彼には、呪いを掛けたのがテイム、その人であるかもしれないことは話していなかったのだ。
確信も持てていなかったし、レウィンは何も力を持っていない一般人だ。
だが彼のお蔭で、綾乃は守り石のペンダントを肌身離さず身に着けてくれている。
もし・・・・・テイムの水属性魔法で攻撃されたとしても、あと二回、石は綾乃を守ってくれる筈だ。
三つあった内の一つは、癒し。
他のどの石が魔力を持つにしろ、他は全部攻撃系。
また呪いを食らった場合は・・・・。
綾乃の体力は、まだあまり回復していない状態であるから、再度呪いを受ければきっと衰弱量は一回目と比ではない。
そうなれば、“癒し”の力を持つ金星国守護神の元へ行かなければならない。
そこまで綾乃の体力がもつか分からないし、加えて簡単に助けてもらえるのかも分からない。
「持ってない・・・・知らない・・・・・・魔力なんて・・・・・・呪いなんて・・・・」
「嘘をつくな!!」
テイムの手が、綾乃の首に触れる。
「俺はお前に呪いを施した!!それを解けるのは、魔力を行使してのみ。魔力を持たずして、解ける訳が・・・・・解ける訳が無かろ

う！！」
「呪いって・・・・・だから何のこと！？」
勿論、綾乃に思い当たるところなど無い。
呪いを解いたのは・・・・・彼女ではなく、彼女の首から下げられているペンダントの石なのだから。
「病に罹り、弱り。果てには、死に至るものだ！弱く何の力も持たない駒など、もはや無価値。そこらの石ころと何の大差も無い。だから、もし力を持たねば死するようにしていた！」
「じゃあ、あの病気は・・・・・・！」
怒りが込み上げてくる。
一週間苦しんだあれが・・・・・全て、この人のせい・・・・。
「そうだ！だが、お前は回復し、ここまでやってきた！力を持たぬ者には不可能なことだ！！」
「そう言われても・・・・・寝ているうちに治っていたんだから・・・・私は何も」
テイムも、守り石のペンダントのことは知っている。
運が良ければ魔力の籠っているものが紛れ込んでいるかもしれないことも。
だが、ペンダントは湊生の指示で服の下に隠してあるため気付けず、そして更にその石が三つも魔力を秘めているというレアな石で――この旅に同行しているレウィンが、それを見抜けることもテイムは知る筈もなく。
そうして、テイムの脳内で行われている情報処理は、誤った方へ誤った方へなされていく。
「未覚醒なのか！？・・・・・・なら、仕方ない。あの呪いは魔力を引き出すものだから、覚せいを促す効果もある・・・・・。綾乃、俺は気が短いんだ。俺の計画通すには・・・・さっさと覚醒してもらわないと困るんだよな。だから・・・・・だから俺は、何度でもあの呪いを掛けてやる！！オマエが覚醒するまで・・・・・！！」
「い・・・・・いや・・・・・・」

如何に苦しかったか・・・・・今朝までのことを思い出せば、恐怖が過る。
いやいやとゆっくりと顔を左右に振る。
「嫌？　ハッ、嫌だろうと何だろうと！　覚醒し、俺の手駒として働かすまでだ！！」
「いや・・・・・・！！」
「働け！！優しく言ってやってるうちに“はい”と言え。でないと、強硬手段に出るぞ。・・・・・・いいか、これは脅しじゃない。本気だ。使えないカスに生存権などない」
「う・・・・・・くっ」
口から、悲鳴が漏れる。
「はいと言え！そして俺に従うと！！」
首が少しずつ絞められていく。
それにつれて、綾乃の視界はやがてぼやけていった。

第二章『水の掟』・第三話『悪魔の口付け・獣の策略』Ｐａｒｔ２（前書き）

『お前には、もう王たる資格は無い』大切な人を次々に失くした少年王から、残ったその王権までもが奪われ、新たな王家が立って早二十年。未だに、新王家は旧王家の支配を受け続けていた。その国の守護神・テイムは、綾乃達を大いに巻き込んだ復讐計画を立てていて・・・・・・！？　（※タイトルの”獣”は”けもの”ではなく”ケダモノ”と読みます。）

「はいと言え！そして俺に従うと！！」
首が少しずつ絞められていく。
それにつれて、綾乃の視界はやがてぼやけていった。
途端、綾乃から光が放たれ、弾けた。
「な・・・・何だ！？一体、何が起こって・・・・・・！？」
「たかが水星国守護神の分際で・・・・・・調子に乗り過ぎたな」
光が次第に収束していく。
あまりの眩しさに目を覆っていたテイムは、目の前の少女から発せられる殺気に気付き、まだ光の消え切らない中目を開けた。
そこには、先程までの自分に怯える少女の姿はなく。
代わりに、少年がいた。
最初は、入れ替わったのかとテイムは思った。
だが、そうではないと本能的に悟る。
少年の顔は見えない。
綾乃が裏世界に来て初めて会った時のレウィンのようにフードを深く被った白衣の少年は、神官達のようだが、それよりも高貴で神々しく。
それで、何とも言えないほどの圧力をその身に纏っている。
「貴様・・・・・誰だ・・・・・！！」
「誰だとはご挨拶だね。アンタの駒になり得る人材に対して」
「駒・・・・・！！」
と、現れた少年は廊下の方を見遣った。

何だろうとテイムもそちらを向く。
やがて、すごい勢いで走ってくる足音が聞こえてきた。
その足音はドアの前まで来ると止まり、ノックするや否やドアが開く。
「綾乃さん！！さっきの光は・・・・・・・・・・・・えっ！？」
入ってきたレウィンは、硬直した。
お茶とお菓子を暢気にもいただいていた彼は、異変に気付いて即座に駆け付けてきたのである。
「どなた・・・・・・です？綾乃さんは・・・・・・どこに・・・・・」
「レウィン。俺だ。湊生だよ」
「あ・・・・・湊生さん！？」
更に驚いたレウィンは、足元に転がってきたものに目を留めた。
それは、綾乃にあげた守り石のペンダントの先端に付いていた石本体。
チェーンは粉砕し、湊生の足元に散らばっている。
「魔法が・・・・・発動したんですね」
「ああ。」
「それで、何があったんです？」
実はな、と湊生はレウィンが室を出て行ってからのテイムの言動について洗い浚い話した。
湊生が言葉を紡ぐにつれ、そこまで知られていることに驚き、テイムは焦りから明らかに挙動不審になっていく。
それも当たり前、湊生はずっと綾乃の傍らのバッグの中にいて、全て聞いていたのだから。
「それは・・・・・・最低ですね」と、湊生の話を聞き終えたレウィンは、その目を鋭く光らせる。
僅かしか彼と話していないテイムだが、彼の変貌ぶりがあまりにも顕著で、それでいながら敬語を崩さないのが尚怖く感じた。
「どういうことだ！？クソ生意気なそいつは誰だ！！言え！！」
湊生はうっとうしいと言わんばかりにフードを脱ぎ、その顔を晒

す。
綾乃と瓜二つのその顔に、テイムは絶句した。
「生意気なのはお前の方だ、水星国守護神、水属性魔法の使い手・テイスラム＝リコレット」
「まさか・・・・・・・・アンタは」
「お、分かった？人を蔑むことしか出来ない、その残念な頭でも分かった？んじゃあ、まあ合格か」
「失礼な・・・・・霊体の分際で・・・・・！！」
何とでも、と湊生は相手にしない。
どうやら、湊生の方がテイムよりも精神的に大人のようだ。
「お目に掛かれるとは思ってもいなかったよ、太陽国守護神！！！」
「いやー、いつでも大丈夫と思っていたんだけど、入られなくてさー」
「ぬいぐるみから出て、綾乃さんの体に入ることが出来なかったということですか？前に出来ると仰られてましたよね？」
レウィンは水星国の城下町までの道のりで尋ねたこと思い出す。
確かに、湊生は出来ると言っていた。
「おー。俺もそう思ってたんだが、実際はそうはいかなくて」
湊生が、いやいや申し訳ないと苦笑した。
「そこで、この石の力が発動したようですね」
レウィンの手中の石には、昨夜入ったヒビよりも深いものが幾本も入っていた。
一つ目は、回復魔法。
二つ目は、光魔法。
使えるのは、あと一度のみ。
レウィンは、自分の推理したことを湊生に確認するように訥々と語り出す。
綾乃と湊生は一度一体化していたため、湊生が綾乃の身体に入ること自体には何ら問題ない。
が、その前の綾乃の精神状態があまりにも悪かった。

再度掛けられる呪いに、首を絞められるという死の恐怖に。
石が主である綾乃の危機を察知して、残った二つ内の一方、光属性魔法が発動した。
それの作用で、湊生は綾乃と一体化に成功したのだ。
だから、湊生は出遅れてしまったのである。
レウィンの推理に、湊生は黙って頷き、肯定の意を示した。
それを聞いていたテイムは動揺し、落胆する。
「な・・・・・・何だよ・・・・・・。綾乃には、魔力は・・・・・・無かったって言うのかよ・・・・・・。はは っ、守り石のペンダントとは・・・・・考えもしなかったな」
「残念だったな」
突然俯いたままのテイムが狂ったように笑い出す。
「ははははは・・・・・だが、太陽大命神殿、アンタも覚醒して間もなくて、魔力のコントロールがイマイチなんだろ？」
「ああ、そうだな。それが？」
さも問題なしと言わんばかりの湊生に、テイムの笑いが消える。
「それがって・・・・・・俺と遣り合って、勝てるとでも思ってんのか！？」
「ん？思ってるけど」
「えっ！？湊生さん！？」と、レウィンも驚いた。
「まあ、それはともかく。綾乃をお前の駒にしたがった、その目的は何だ？」
「・・・・・・・復讐を。」
「旧王家、コルトヴァール家にですか？」
「そうだよ。未だこの国はコルトヴァールの支配下だ。それを、乗っ取り返し、当主が跪き泣いて謝るような復讐を・・・・・！！」
「はいはい。で、そのどこの要素に魔法関わんの？」
相変わらず、湊生はテイムの発言を流す。
いつもは綾乃とレウィンに流されている立場なので、レウィンとしては少し違和感がある。

「コルトヴァールのバックには、敵国がいる。敵国を倒し、公爵家を失脚させる。そのためには、より多くの“魔力持ち”が必要なんだ」
「なーんだ」と、湊生。
「そうですね・・・・」
レウィンも小さく溜め息をつく。
「何なんだ、その脱力感！？」
「だってよ、まさか目的一緒だなんて思わないし」
「だから、目的一緒でも弱い奴らだと足手纏いだし、勝算も無くなるだろ！！だから、俺は・・・・・・！！」
悪人のふりしてどうにか力を出させようとしたんだ、と言おうとするも、湊生は聞こうとしない。
自分が聞いたくせに。
「まあ、もういいよ。協力してくれるならそれでいいから。本音を吐かせるためとは言え、いい加減演技に付き合ってやるのも疲れてきたしな・・・・・・」
「演技だったのですか、御二方共！？」
「って、俺の演技は無意味か！！オイ、太陽大命神！！」
「うい、無意味。俺、演技だって知ってたし。綾乃やレウィンは・・・・・気付いてなかったようだけどな」
湊生が演技だということに気付いたのは、綾乃と一体化してから。
理由はないが、直感的に。
「それもどーなんだよ！？」
湊生は綾乃から離れ、魚に戻る。
綾乃の身体から抜け出た光る玉が魚のぬいぐるみの中に吸い込まれていく。
崩れ落ちる綾乃の身体を慌ててレウィンが受け止め、壁に凭れ掛かるように座らせた。
ぬいぐるみの中に入ると、魚の目が瞬いた。
空中を浮かびながら“問題解決、よかったよかった”と繰り返す

湊生から少し離れたところで、火花を散らす人物が約一名。
確かに、仲間になってくれたのはよかったし、目的が同じだし、本当は悪い人じゃないらしいけど。
「よくはないですよ・・・・・・」
レウィンの肩が震えている。
これには、湊生もテイムも頬を引き攣らせた。
「テイム様・・・・・綾乃さんの首絞めておいて・・・・・・演技で誤魔化せるとでも思ってるんですか・・・・・」
「いや、それは悪かったけど！！殺すつもりは・・・・・・」
「そんなのは当たり前です！！」
レウィンは一声怒鳴って、すぐに満面の笑みを見せた。
そしてテイムに近付き、何かを耳打ちする。
少し離れているがために何を言っているのか分からない湊生は、テイムの顔をじーっと見ていた。
すると、顔色が青くなって、その後白くなった。
レウィンは言い終えると笑みを浮かべたまま振り返って、近くに控えていたワーム秘書の元へ行き部屋を借りる。
綾乃を抱きかかえ、そのままレウィンは出て行った。
「なあ、テイム」
まだブルブルと体を震わせているテイムに近寄った。
「さっき、レウィンに何言われたんだ？」
「・・・・・・・・・。」
「なあ、何て？」
テイムが言った貴族・王族、守護神にすら身分関係無しのレウィンのセリフは、湊生も凍らせた。
純粋無垢で、優しく情の厚いレウィンが、まさかそのようなことを言うとは考えもせず。
湊生がブラックレウィンの存在を後に主張することになった、そのセリフは。
「“君が国を乗っ取りかえして・・・・・その後、ちゃんと統治出

来ると？僕にはそうは思えないんですけど。テイム様もそうは思いませんか？ほんっと笑っちゃいますね。まったく、おふざけも大概にして欲しいって言いますか・・・・今度綾乃さんに危害を与えてみて下さい。体力・魔力はない僕ですけれど、持てる知力を総動員させてこの世に姿を現せないほどの辱めを受けて頂きたいと思っているのですが、いかがですか？”って言ったんだよ、アイツ！！身分下のくせに・・・・・・・でも、俺、アイツには逆らわないようにする・・・・・」

「ああ、テイム・・・・それがいいよ・・・・」

第二章『水の掟』・第三話『悪魔の口付け・獣の策略』Ｐａｒｔ３　（前書き）

『お前には、もう王たる資格は無い』大切な人を次々に失くした少年王から、残ったその王権までもが奪われ、新たな王家が立って早二十年。未だに、新王家は旧王家の支配を受け続けていた。その国の守護神・テイムは、綾乃達を大いに巻き込んだ復讐計画を立てていて・・・・・・！？　（※タイトルの”獣”は”けもの”ではなく”ケダモノ”と読みます。）

「なあ・・・・・正直傷付くんだけど」
「自業自得です。僕は知りません」と、レウィンはそっぽを向いた。
テイムの手配で、一行は金星国との国境まで馬車のような乗り物で（少し楽して）行けることになった。
だが、一度殺されそうになった綾乃は、実はテイムの件の行動は全て演技であったことを聞かされた今も尚彼に対して怯えてしまっていた。
そのためにテイムが左端に座り、中央にレウィン、そして右端に綾乃という状態。
因みに湊生は綾乃の膝の上だ。
綾乃は隣に座るレウィンの袖を僅かに掴み、全身を震わせていた。
それでいながら、ちらりちらりとテイムの方を見て、安全確認をしている。
原因はテイムにあり、間違いなく非も彼にある以上、レウィンも彼を助けようとは思ってはいなかった。
「おま・・・・・仮にも俺は水星国守護神だぞ！？何様のつもりで・・・・」
「何様だろうと、自業自得です。一切救いの手を差し伸べる気はありませんので」
「うっ・・・・」
《おー言ってやれ、言ってやれ！！》

湊生は煽ってヒートアップさせようとしたが、テイムや湊生よりも精神的にレウィンの方が大人であるため、それに乗りはしなかった。
「取り敢えず、名誉挽回のためにもしっかり働いて下さい。それで、綾乃さんが心を許すかは別の話ですけど」
「おう・・・・・分かった・・・・」
テイムは、完全にレウィンの支配下に入りつつあった。

「・・・・・・・。」
ピシッ。
荷台に乗せられた綾乃の旅行鞄の中。
太陽国国王・サフィールより預かった丈夫な木箱に入れられた六つの宝玉の内一つに、ヒビが入った。

その夜。
やはりテイムから少し距離を取って眠る綾乃は、大いに変な夢を見た。
第三者としてみるものではなく、記憶を共有するかのような、夢の中の人物になりきる系の夢。
『えーと。何て言うか・・・・鈴木さん、本当にこの大学が第一志望・・・・・?』
高校三年生の春。
新任ながら傍迷惑なことにも三年生の担任になった大林先生は、三年生になってすぐにあった第一回全国模試の結果を片手に、唸り

ながら尋ねた。
彼女の前には、先日自分が書いた志望校の表が置いてある。
『はい、そうですけど・・・・・ダメですか』
定期考査とは違い、実力考査と模試はこうして面談時に返却される。
だから、まだ私はその結果がどうなのかを知らない。
でも・・・・今までのを思い返してみれば、相当悪い気がする。
『今の勉強時間は?』
不意に話を大きく変えられ、私は躊躇した。
『四時間・・・・半、くらいです』
『まずまずね・・・・』
『学年集会の時、二年の十月から受験勉強を始めるようにと聞いたいたので、ちゃんとしてはいたんですけど・・・・・・』
『そう・・・・・。それでコレってことは・・・・・勉強方法が合ってないとか、かしらね?』
私は、週二の割合で英語と数学を習い、その塾で毎日自習をして帰っている。
それなのに、成績は向上するどころか順位はどんどん下がっていった。
『・・・・はい。自分で見てみて』
渡された結果を見て、思ったことは“ああ、やっぱり”だった。
判定は、“E”。
合格の可能性は、皆無に近い。
黙っている私を前に、大林先生は大きく一つ、溜息をついた。
『志望校、変えましょうか』
怖れていたその言葉に、体が強張る。
『・・・・・嫌です。変えたくありません』
『どうして、この大学がいいの?』
『私には、三歳年上の姉と、下に五人の弟妹がいるんです。ただでさえ塾に行かせてもらえて、大学にも行かせてくれるって言うんで

すよ。だから・・・・だから県内の国公立でないと・・・・・・』
そうよね、と私の家庭事情を知る大林先生は頷く。
『気持ちは凄くよく分かるけど、問題は成績。勉強の仕方変えて頑張ってみて、次の模試の結果でもう一度考えてみましょう。一応、県外も調べてみて？』
先生の言葉の端々から、やめるべきだという言葉が窺える。
そして他県の、もっとレベルの低いところを、と。
でも私は諦められない。
次の模試までに・・・・・少しは上げなければ。

「・・・・・・って夢見たんだけど」
翌朝夢の内容を話すと、湊生が笑い出した。
《へー。大学受験の夢？おっまえ、高校受験すらしてねーのに気がはえーな》
「ダイガクジュケン？・・・・・えっと、それが何かはわからないんですけど、少なくとも綾乃さんは体験していないんですよね」
綾乃が話す中、レウィンは知らない単語だらけで終始頭上に疑問符を浮かせていた。
テイムも聞いてはいたが、そこまで真剣にではなかったため疑問に思う点を見事に流して話がザックリ状態だ。
「うん。夢にしてはリアリティがあったし、誰かの記憶・・・・・みたいな」
「夢はその人の中に眠る潜在的な願望や記憶が関係しているって言いますが・・・・・違うようですね。本当に、何なんでしょう？」
そしてその日も、綾乃は同じような夢を見ることになる。

『これはちょっと・・・・・ヒドイんじゃない？』
お母さんに渡そうかどうしようかと戸惑っていると、手に持っていた成績表が消えた。
仰け反るようにして見れば、そこには姉の姿が。
彼女の手には、消えた成績表がある。
『あ！お姉ちゃん、返してよぉっ』
私の成績を見て、お姉ちゃんは絶句しているようだった。
いつも茶化してくる彼女だが、さすがにその気にすらなれないようで。
『アンタ、第一志望は―――大だったよね？絶望的な・・・・・』
『ムー。だったらお姉ちゃんが教えてよ！！』
『無理。私は専門だよ？頭悪いし。そもそも、ウチの家系は頭良くないの。その代わり楽才はあるけどね。アンタフルート得意でしょ。私バイオリン上手いし』
『今は楽才よりも学才が欲しいの～！！』
半泣きで縋り付く私に、姉はらしくもなく真剣な顔をした。
『塾もダメ、自学自習もダメか・・・・・・仕方ない』
『え・・・・？お姉ちゃん・・・・・？』
『友達にカテキョー頼んでみる。どう？』
『いいの！？その人、頭いい？』
『拝みたくなるくらいいいよ。もうあれは神だって』
自信満々の姉に、私は少し頼りないと思いながらも任せてみることにした。
だが・・・・・・。
そうして一週間後、家にやってきたその家庭教師は。
『中学生・・・・・？』
開いた玄関のドアから差し込んでくる光が逆光になっていて、その顔は見えない。

だがよく知った有名私立の中等部の制服を着ている。
背は、低くも無く、高くも無いと言った感じの男子生徒。
『初めまして。僕は、さ・・・・い・・・・と』
その時、異変は起こった。
お蔭で、少年の名前は途絶えた。
ズドン、と突然全ての物に過剰なまでの圧力が掛かる。
思わず私は片膝を床に付けた。
次いで、震度の強くない地震が起こり、それに同調するかのように自分自身を含めて視界に映る全てのものにノイズが走る。
まるで、その存在が揺らぐかのように。
地震のように地面が揺れたが、明らかに地震ではなかった。
ノイズに加え、全てのものがクネクネと変な動きをしていたのだ。
『え・・・・・何!?』
“見ないで・・・・・見ないで!!”
声は、女性のもの。
再度掛けられた声を境に、視界は完全に闇に包まれた。
不安になってじっとしていられなかった私は、暗闇の中を一歩、また一歩と歩き出した。
『ここは・・・・・どこ?』
“ここは・・・・・今、私がいる場所”
声は、律儀に答えてくれた。
私は思い切って頼み込む。
『じゃ、いるんでしょ!?姿を見せて!!』
“私は・・・・・貴女の目の前に”
ぼんやりかたどり始めたその姿に、私はごくりと唾を飲み込んだ。

第三章『砂の掟』・第一話『金砂の都・欠如した記憶』Part1（前書き）

『――――ねえ・・・・今、アナタはどこにいるの？”レウィン”――――』

砂漠の国である金星国は、不可触賤民出身の王（通称”奴隷王”）によって治められている。

その娘であるサラ（サラネリア＝ノーリネス）の、護衛兼遊び相手として彼女に仕えていた使用人の息子が、突如行方不明になってしまった。

二年後。久々にサラは彼と再会することになったが・・・・・・！？

第三章『砂の掟』・第一話『金砂の都・欠如した記憶』Part1

「お初にお目にかかります、姫様。私は・・・」
使用人の息子だという彼は、跪いたまま、微笑んで自らの名を告げる。
父王は、娘と近しい年齢で、信頼のおける者の子供を探した。娘の、相手役兼ボディガードに、と。
自分達では、いつか娘を守ることが出来なくなる日が来る。
それが、分かっていたから。

姫は・・・・・・、“魔力持ち”だ。

そうして選ばれたのが、彼。
当時、姫は僅か三歳だった。
物心がついて間もないため、姫が覚えている三歳の時の出来事はこの時のことだけだ。

以来、毎日が楽しいことでいっぱいだった。
城のお庭で走り回って。疲れて、昼寝をして。
いつもみんなで。
お父様と、
お母様と、

お兄様と、それから。

いつも、私の傍には彼が居た。

私は彼に絶対的な信頼を寄せていた。

お願い、行かないで。

・・・・・・レウィン・・・・・・。

「こっちに来てから勉強してるけど・・・・・不思議ね、ぜんぜん知らないことなのに、簡単に覚えられるし、もともと知っていたみたいな感覚すらするし」

彼女・鈴木砂羅は目の前のベッドで眠り続ける女の子に話し掛け、苦笑した。

砂羅の金髪碧眼は、イギリス人である祖父から隔世遺伝したもの。

彼女はクウォーターで、漢字は実を言うと当て字であるが、その英語圏のっぽい名前の響きは祖父が決めた。

当の彼女は、裏世界に来て以来維持ししている半霊体状態のため、

室を何度も出入りする宮女達も彼女の存在には気付いていないようだった。
一方、眠る女の子の名は、サラ。
本名はサラネリア＝ノーリネス。
ここ、守護神中最年少の砂漠の国である金星国の守護神である。
「これも知識を私と共有してるからなんだよね？　もう一人の私・・・・」
問いかけるも、返事は無い。
「・・・・・・ねえ、起きてよ・・・・・・」
女の子はもう半年も目覚めていないのだという。
飲食無しで耐えられるのは保ってあと二月だ。
魔力のおかげでそれだけ生きられるのだが、そのまま眠り続けると死に至る。
だから、砂羅は彼女を起こそうと頑張っているのだ。
声を掛けてみたり、歌ってみたり、頬を叩いてみたり。
けれど・・・・もう、万策が尽きた。
そっとサラの頬を撫でる。
「ここまであなたを傷つけたモノって、いったい・・・・・」
城内で偶然聞いた当時のことを、砂羅は思い出してみた。

半年前・・・・・
「姫様！　サラ姫様！　どこにいらっしゃるのですか！」
ある日の夜、サラは突如行方を眩ました。
その事態に気付いた執事がすぐさま国王夫妻に報告し、城の者達が総出で捜索が始まることとなった。
毎日探し、発見されたのはその十日後のこと。
巨大な砂漠の中の金星城があるオアシスの外れ、砂嵐が頻発する

というので人があまり寄り付かないという場所で砂に埋もれるようにしてそこに横たわっていたのである。
何故そこにいたのかは、誰も分からなかった。

守護神というのは脅威の治癒力（自己回復力）を持つために、別に怪我だの病気だのといったことは心配する必要は基本的に無い。
それより危ないのは、心の傷・・・・・・。
一度殻に籠もってしまえば、自らが死に至るまで深い昏睡状態に陥ってしまうのである。
勿論必ず死ぬ訳ではなく、途中に何らかの衝撃や言葉に反応し、目を覚ますこともあると言われているが、実例は今のところサラを除いて存在しない。
砂羅は、表世界から召喚された他の者たち同様宝玉に封じ込まれた筈だった。
だが、何の因果があってか、彼女の意識は裏世界の自分であるサラの元へと導かれ。
気が付けば、眠りにつき目覚める気配の無い女の子の傍らに立っていたのだ。
以来、女の子と鎖が繋がっているかのように一定距離――――金星国国内の城付近だけしか動けずにいる。
半霊体状態ながら物には触れることが可能なため、暇な時は読書をして、独力で自分が今どういう状況にあるのか突き止めた。
城の者達の会話を盗み聞きすれば、眠るもう一人の自分が太陽国の使者に必要とされていて、その使者はもう太陽国を出発したとのことだった。
太陽国を出て、水星国に達し。
そうなれば、来るのは時間の問題。

それまでに起こさないと。
だが、結局何やっても目を覚まそうとはしなかった。

ピシッ
太陽国の使者一行が水星城を立ったという知らせが来たその日。
割れるような音がした途端、見えない壁が一部欠けたような感覚に陥った。
サラとの鎖に、綻びが生じた。
だが反動で、砂羅が助けを求めるために呼びかけていた太陽国の使者であるという少女との一部記憶の共有が起こってしまった。
それは・・・・・・・一番、彼女が後悔し、消したいと心から願った瞬間。
“見ないで・・・・・・見ないで！！”
砂羅は取り乱し、半狂乱で泣き叫ぶと記憶の共有は収束した。
荒い息を深呼吸で落ち着かせ、そこに残された少女――――篠原綾乃を見て、ホッとする。
彼女なら・・・・・“サラ”を――――もう一人の私を助けてくれるかもしれない。
お願い。
目覚めさせて。
“サラ”の、命が尽きる前に。

『アナタは・・・・・誰？』
綾乃は呆然と問うた。

姿が明確になっていきながらも透けていて人間味の無い女性に。
年齢からして、十代後半もしくは二十代前半。
“私は・・・・・・砂羅。鈴木、砂羅”
『お、表世界の人・・・・・・！？』
“そう。私は今、貴女とこうして夢を通して話しているけど、体の無い状態で裏世界の私の元にいます。金星国守護神・サラの元に”
『金星国守護神・・・・・・』
“お願い。早く来て。助けて。”
意味が分からず、『助ける？』と反復する綾乃に詳しく説明出来るほど時間は残っていないらしく、再び砂羅の姿は霞んでいき、声もお互いに届かなくなっていく。
最後に、砂羅の口が動いた。
音にはならなかった。
でも綾乃は口パクで何とか読み取ろうとして。
絶句した。
解釈が合っていれば。間違っていなければ・・・・・おそらくそれが意味するのはこれ。
“死んでしまう前に”
その解釈は、一切間違ってなどいなかった。

第三章『砂の掟』・第一話『金砂の都・欠如した記憶』Part1（後書き）

おそらく今日中にサラのキャライメージ画を私個人のサイトにアップします。

そこで元々は小説を書いていたんですけど。
全て消したのでクリアですが、登場済みのキャラのみ投稿していきます。

投稿完了した次の小説の後書きでアドレスを載せます。是非ご覧下さい。
”見ました”などの報告や感想等頂けたら嬉しいです♪

太陽系の王様画廊１

注意：スキャンによりぼやけた物がありますので、モノによって拡大してご覧下さい。

綾乃とレウィンの旅前と旅中の服装イメージ。
＞ｉ３２６１６―３９６０＜

金星国守護神：サラ（サラネリア＝ノーリネス）＆鈴木砂羅
サイズ変更にて特にぼやけております。
二度程イラストをクリックし、表示されたイラストを拡大して下さい。（とても鮮明に見られます）
＞ｉ３２６１７―３９６０＜

太陽大命神の正装。
＞ｉ３２６１８―３９６０＜

←オマケの第三世代。
本編には出てこないため、ここで紹介。
右から、
ティエラ＝サブルザール＝ヴァーイェルド（テラ）
フドゥル＝トルエノ＝ヴァーイェルド（フゥ）
シューネル＝フロイライン＝ヴァーイェルド（シュネー）
フラメル＝フィスティ＝ヴァーイェルド（フラム）です。
＞ｉ３２６１９―３９６０＜

彼等は四つ子で、生まれた順はシュネー、フラム、テラ、フゥ。

これで一つ小説書こうかなーとか思いつつ。
因みに、そうなれば主人公はフゥです。
活動報告に書いたのですが（もし見られていないなら是非ご覧下さい）、第三世代のメインキャラは五人。
その四人は彼等で、もう一人はヒロインのルーチェです。
本当は彼女も同時にアップ予定だったのですが、諸事情により出来なくなりました。
ロングのツインテールの少女という設定。
（※フゥはよく私の友人に女の子だと勘違いされるのですが、れっきとした男の子です）

コメント、感想、リクエスト等ありましたらよろしくお願いします！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2733v/

太陽系の王様 THE KING OF SOLAR SYSTEM

2011年10月10日03時26分発行